

埋蔵文化財調査報告書94

桜神明社古墳（試掘調査）

2022

名古屋市教育委員会

埋蔵文化財調査報告書 94

桜神明社古墳（試掘調査）



2022

名古屋市教育委員会

例 言

1. 本書は、愛知県名古屋市南区呼続四丁目に所在する桜神明社古墳の試掘調査報告書である。
2. 試掘調査は、名古屋市住宅都市局街路計画課の依頼を受けて名古屋市教育委員会文化財保護室が実施した。調査期間及び担当者は以下の通りである。

令和2年度
令和3年2月15日～2月26日
調整担当 岡 千明・深谷 淳
調査担当 伊藤厚史

令和3年度
令和3年5月10日～6月4日
調整担当 真鍋直子・深谷 淳
調査担当 伊藤厚史・林田愛美・水野裕之
3. 調査面積は、令和2年度約14.4m²、令和3年度68m²である。
4. 桜神明社古墳の地形測量及び遺構平面図作成等測量業務は、第一設計監理株式会社に委託した。本書に使用した座標は、世界測地系第VII系、水準値は東京湾平均海面（T.P.）である。
5. 遺構図面、出土品の水洗、注記、接合実測等整理作業は、安藤明子・入谷敦子・上田玲子・小川敦子・酒井史子・仲間理恵・樋上佐知子・山本雅代が行なった。
6. 土層の色調は、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』による。
7. 調査期間中、名古屋市文化財調査委員会考古・埋蔵文化財部会委員の指導助言を受けた。

井上光夫委員・黒沢 浩委員・山本直人委員
8. 調査にあたり、以下の方々にご協力・ご教示いただいた。

赤塚次郎・浅田博造・大村 陸・酒井将史・桜神明社氏子総代会・住宅都市局都市計画部街路計画課・長楽寺・西本昌司（敬称略 五十音順）
9. 本書の執筆・編集は伊藤厚史による。

■目 次

例 言	1	第3章 遺構	15
目 次	ii	1 令和2年度 試掘調査	15
挿図目次	ii	2 令和3年度 試掘調査（その2）	22
表目次	iii	第4章 出土遺物	33
写真図版目次	iii	1 墳輪	33
第1章 調査の経緯	1	2 土師器・須恵器・灰釉陶器	34
1 桜神明社古墳のこれまでの認識	1	3 陶器・磁器・玩具	34
2 調査に至る経緯	2	第5章 総括	40
3 調査の経過	2	1 調査の成果	40
調査日誌抄	3	2 桜神明社古墳築造の意義	47
第2章 位置と環境	6	引用・参考文献	54
1 位置	6	写真図版	57
2 歴史的環境	7	報告書抄録	73

■挿図目次

第1図 桜神明社	1	第22図 第4トレンチ土層断面図	26
第2図 桜神明社古墳	1	第23図 第5トレンチ平面図・土層断面図	27
第3図 調査風景（第3トレンチ）	3	第24図 第6トレンチ平面図・土層断面図	28
第4図 調査風景（第2トレンチ）	3	第25図 第7トレンチ平面図	29
第5図 調査風景（第8トレンチ）	5	第26図 第7トレンチ土層断面図（1）	30
第6図 調査風景（第4トレンチ（東））	5	第27図 第7トレンチ土層断面図（2）	31
第7図 位置図	6	第28図 第8トレンチ平面図・土層断面図	32
第8図 富部神社よし祭	8	第29図 遺物図（1）	35
第9図 桜田勝景碑	8	第30図 遺物図（2）	36
第10図 南区 遺跡分布図	9	第31図 遺物図（3）	37
第11図 明治17年地籍図と現代の地図を重ねた図	11	第32図 葦石	39
第12図 昭和11～14（1936～1939）年頃の空中写真（旧日本軍撮影 B-13 78）	12	第33図 葦石	39
第13図 桜神明社古墳全体測量図	13	第34図 桜神明社古墳 墳丘想定図	41
第14図 トレンチの位置	16	第35図 桜神明社古墳エレベーション図（1）	43
第15図 第1トレンチ平面図・土層断面図	17	第36図 桜神明社古墳エレベーション図（2）	44
第16図 第2トレンチ平面図・土層断面図	18	第37図 蓋形埴輪の型式分類	46
第17図 第2トレンチ平面図（葺石出土状況）	19	第38図 諸要素の比較	46
第18図 第3トレンチ平面図・土層断面図	20	第39図 笠縁の接合技法	46
第19図 第3トレンチ平面図（葺石と埴輪の出土状況）	21	第40図 笠部A類の型式組列	46
第20図 トレンチ位置集成写真	23	第41図 愛知県内出土の蓋形埴輪（尾張）	49
第21図 第4トレンチ平面図	25	第42図 愛知県内出土の蓋形埴輪（三河）	50
		第43図 桜神明社古墳の立地（笠寺台地地形分類図）	51

■表目次

表1 周辺の遺跡一覧表	10
表2 第8トレンチ南壁土層断面の層序	33
表3 遺物観察表(1)	38
表4 遺物観察表(2)	39

表5 蓋形埴輪出土古墳の編年	48
表6 伊勢湾沿岸の渦・港津と古墳	51
表7 愛知県内の蓋形埴輪出土遺跡一覧表	52

■写真図版目次

写真図版1 現況	57
1 桜神明社古墳遠景(南東から)	
2 桜神明社古墳と本殿(北東から)	
3 桜神明社古墳と本殿(北から)	
4 桜神明社古墳西壁(北西から)	
5 墳丘から拝殿・廊下を臨む(北から)	
6 墳丘北側の濠(西から)	
7 墳丘南東部(西から)	
8 墳丘北側の濠(南東から)	
写真図版2 第1トレンチ	58
1 調査地遠景(西から)	
2 調査地遠景(東から)	
3 調査区全景(東から)	
4 調査区全景(西から)	
5 北壁西端土層断面(南から)	
6 北壁東端土層断面(南から)	
写真図版3 第2トレンチ	59
1 調査風景(西から)	
2 調査区全景(東から)	
3 調査区全景(北西から)	
4 舟石出土状況(西から)	
写真図版4 第3トレンチ	60
1 調査区全景(北から)	
2 調査区全景(南から)	
3 東壁南端土層断面(西から)	
4 東壁中央土層断面(西から)	
5 調査区南端(北から)	
6 調査区北端(西から)	
写真図版5 第4トレンチ	61
1 調査区全景(北から)	
2 調査区全景(南から)	
3 舟石出土状況(西から)	
4 舟石出土状況(東から)	

写真図版6 第4トレンチ	62
1 調査区全景(南から)	
2 墳丘と舟石出土状況(北西から)	
3 調査区と塚丘・本殿(北から)	
4 舟石出土状況(西から)	
5 舟石出土状況(西から)	
6 第4トレンチ(東)(北から)	
7 第4トレンチ(東)(南から)	
写真図版7 第4トレンチ	63
1 墳輪出土状況(東から)	
2 土師器出土状況(北から)	
3 須恵器出土状況(北から)	
4 東壁北端土層断面(西から)	
5 第4トレンチ(北)(北から)	
6 第4トレンチ(北)(南から)	
7 第4トレンチ(北)東壁土層断面(西から)	
写真図版8 第5トレンチ	64
1 調査区全景(北から)	
2 調査区全景(南から)	
3 舟石・埴輪出土状況(北から)	
4 墳輪出土状況(西から)	
5 調査区北端東壁土層断面(西から)	
6 調査区北端東壁土層断面(西から)	
写真図版9 第6トレンチ	65
1 調査区全景(北から)	
2 第6トレンチ(南)全景(北から)	
3 第6トレンチ(南)南端西壁土層断面(東から)	
4 第6トレンチ(南)中央西壁土層断面(東から)	
5 第6トレンチ(南)北壁土層断面(南から)	
6 第6トレンチ(北)(東から)	

写真図版10 第7トレンチ	66	写真図版14 遺物	70
1 調査区全景（東から）		1 陶磁器・ガラス瓶ほか 第1トレンチ出土	
2 葦石出土状況（南から）		2 陶器・埴輪 第2トレンチ出土	
3 調査区西端南壁土層断面（北から）		3 磁器 第3トレンチ出土	
4 調査区西壁土層断面（東から）		4 玩具 第3トレンチ出土	
5 調査区内中央土層断面（北壁）（南から）		5 墓輪 第3トレンチ出土	
6 第7トレンチ（西）全景（西から）		6 墓輪・灰釉陶器 表採	
7 第7トレンチ（西）土層断面（北から）		7 墓輪 第4トレンチ出土	
写真図版11 第7トレンチ	67	8 墓輪 第4トレンチ出土	
1 第7トレンチ（東）（北西から）		写真図版15 遺物	71
2 第7トレンチ（東）（西から）		1 墓輪 第4トレンチ出土	
3 南壁土層断面（北から）		2 墓輪 第4トレンチ出土	
4 葦石・埴輪出土状況（北から）		3 墓輪 第4トレンチ出土	
5 調査風景		4 土師器 第4トレンチ出土	
6 調査風景		5 須恵器 第4トレンチ（東）出土	
写真図版12 第8トレンチ	68	6 墓輪 第4トレンチ（東）出土	
1 調査区全景（西から）		7 墓輪 第4トレンチ（東）出土	
2 調査区全景（東から）		8 墓輪 第4トレンチ（東）出土	
3 調査区東壁土層断面（西から）		写真図版16 遺物	72
4 調査区南壁土層断面（北から）		1 墓輪 第4トレンチ（東）出土	
5 調査区東端南壁土層断面（北から）		2 墓輪 第4トレンチ（北）出土	
写真図版13 遺物（蓋形埴輪 第5トレンチ出土）	69	3 墓輪 第5トレンチ出土	
1 笠下半部の線刻		4 墓輪 第5トレンチ出土	
2 笠下半部の線刻		5 汽車土瓶 第6トレンチ出土	
3 笠下半部の断面		6 汽車土瓶 湯呑を被せた状態	
4 笠下半部の内面		7 墓輪 第7トレンチ出土	
5 笠下半部の外顔		8 陶器・須恵器・埴輪 第8トレンチ出土	

第1章 調査の経緯

1 桜神明社古墳のこれまでの認識

桜神明社古墳は、名古屋市文化財調査保存委員会編『文化財叢書第十四号 名古屋市指定文化財目録』(昭和32年(1957)12月31日)に次のように記載されている。

「当古墳は直径三十七米高さ五・五メートルの円墳でさして大きなものとはいわれぬが、墳の北側に巾約二米余、深さ一メートル以上の溝（堀）があり、西側にもその痕跡があつて、その状態は市中の古墳の中最もよく昔の形そのまゝが見受けられるものである。」

古者の言によれば、明治末期まではこゝに子供の入るのを禁じ、年一回氏子集って、古墳（円丘）の除草、植樹、土盛りなどを実施して古墳の保全に努めたものという。しかし、戦後は荒るゝがまゝに放置され、附近の住宅街の污水が溝に流入、あたりは塵埃棄場と化し、不潔、不衛生のみならず涼も次第に埋立てられ原型がくづれて来た。思うに戦後文化財の破壊さるゝもの多く、大須の二子山、高蔵、村上、城山等の古墳が殆ど破壊されてしまった事実に鑑み、この古墳のようによく原型を保っている場所は保護を加えるべきであるが最近氏子総代初め一同の方がその点を自覚して神明社と共にこの古墳の保全維持に着手されたのはよろこびにたえない。その事業の完成を期すべきである。」

飯尾恭之氏は、『南区の原始・古代遺跡』(昭和44年刊行)で「墳丘の規模は直径三六m、高さ四・五mで葺石はみられない。墳丘の裾から六mの間をおいて幅三mの周溝が西・北側をめぐり、今も水をたたえている。この古墳は一度も発掘されたことがなく、今まででは外形の観察から中期古墳とみられていたが、昭和四十二年墳丘の東裾部で半ば埋れた状態で一個体分の須恵器蓋環が出土した。口唇部の下端を欠くが、比較的古式の特色をしめす器形で五世紀終末頃にその年代が求められる。したがって本古墳もこの時代を下限とするものであろう。」(文献70)と述べられている。

池田陸介氏は、『増補 南区の歴史探訪』(平成28年(2016)刊行、初版は昭和61年)で「古くなった土留め用の板と杭を取り去ったとき、須恵器の高杯の杯部破片と埴輪片が採集されたことを、総代の近藤新太郎氏からお聞きしました。また、昭和四十年代に堀さらえをしたとき、第二次大戦の小銃の先に取り付けるゴンボ剣とともに、刀片などが採集されたことがわかっています。また、神社境内は桶狭間合戦のとき、織田方の兵卒の宿舎になった所と伝えられており、鳥居の前の道路は中世から近世にかけて塩が運搬された道で「塩付街道」と呼ばれています。」と紹介されている(文献12)。



第1図 桜神明社



第2図 桜神明社古墳

2 調査に至る経緯

前節で紹介したように、市内の古墳としてはよくその形状を保った古墳の一つとして認識されてきたが、これまで発掘調査が実施されたことがなかった。

古墳は、昭和31年（1956）12月10日に名古屋市文化財指定並に保存費助成要綱（以下、要綱）により市文化財第46号として指定されていた。昭和47年3月23日、条例第4号で名古屋市文化財保護条例（以下、条例）が制定（同年4月1日施行）されたことに伴い要綱による指定は廃止され、現在は文化財保護法に基づく「周知の埋蔵文化財包蔵地」となっている。なお、要綱廃止後に制定された条例については現在、名古屋市文化財保存及び活用に関する条例（平成27年（2015）11月1日施行）に改正されている。

このような背景がある中、令和2年（2020）8月17日に桜神明社より名古屋市長あてに「桜神明社古墳の名古屋市指定文化財再指定陳情書」の提出があった。

本市においては、名古屋鉄道名古屋本線（桜駅～本星崎駅間）連続立体交差事業の事業化を目指しており、計画案では仮線の一部が、桜神明社境内にかかることが想定されており、工事による影響が懸念されていた。これらの経緯を踏まえ、名古屋市教育委員会文化財保護室と名古屋市住宅都市局街路計画課とで協議を行い、事業を円滑に進めるためには古墳を保存する方向で検討することが必要という方針とし、古墳の形状や規模等を把握することを目的として調査を実施することとなった。

令和2年11月13日付け2住街第70号で街路計画課から試掘依頼が提出され、文化財保護室では、令和3年2月15日～2月26日の期間で試掘調査（試掘坑3か所）を実施することとした。また、地形測量調査を業務委託として実施した。

上記の調査結果を精査し、より詳細な調査が必要と判断したため、令和3年度に2回目の試掘調査を実施することとなった。令和3年4月21日付け3住街第5号で街路計画課より試掘依頼が提出され、令和3年5月10日～6月4日の期間で2回目の調査を実施した（試掘調査その2（試掘坑5地点10か所））。

3 調査の経過

桜神明社古墳は、最初に述べたように、これまで発掘調査が実施されたことがなく、境内の中央に円丘（現況の墳丘規模は、直径約25.2m、高さ約3.4mである）が残り、7.0～10.0メートル北側及び西側に鈎の手に曲がる溝（濠）が掘られている。墳丘形状、規模、埋葬主体部、出土品、年代等不明な点が多い古墳であった。そのため、令和2年度の調査は、古墳の範囲、残存状況を調べるために、試掘坑を3か所に設定した（第1トレチ～第3トレチ）。

第1トレチは、墳丘の北東、境内の外側に位置し線路との間の土地である。墳丘の北側にある溝（濠）が、東方へ掘られていたかを調べるために、幅0.8m×長さ4.0mで設定した。第2トレチは、墳形や周濠の有無を明らかにするため、墳丘の東側、墳裾から東方に向って、幅0.8m×長さ8.0mで設定した。第2トレチでは、葺石が出土した。第1トレチから始め、第2トレチが終わった時点で、第3トレチに着手した。第3トレチは、北側の溝（濠）の規模や年代を調べるために、溝（濠）に直交する形で幅0.8m×長さ6.0mで設定した。第3トレチ調査は、調査開始頃にあった降雨により、溝（濠）埋土に浸透した雨水がトレチ内に流入し、水をくみだしながらの調査となった。

調査の結果は、令和3年3月30日付け2教文第408号で文化財保護法第99条第1項の規定により愛知県県民文化局長あて報告した。また、令和3年（2021）4月7日付け3教文第8号で街路計画課長あて回答した。

令和3年度の調査（その2）は、2年度の調査では古墳の形状等明らかにするのには不十分であったた

め、再び試掘坑を5か所に設定した（第4トレンチ～第8トレンチ）。

調査は、埴丘の東南部に設定した第8トレンチから始めた。その北側、第7トレンチは昨年度の第2トレンチを拡幅する形で設定した。第5トレンチは、葺石の確認のため設定した。第6トレンチは、北側の溝（濠）の末端を明らかにするため設定した。第4トレンチは、埴丘の北側、昨年度の第3トレンチの延長線上に設定した。

調査の終盤、第2（7）、第8トレンチで2年度に検出し、盛土と判断していた淡黄色土は、黒色土ブロックが混じっていることが判明したため、掘削した。擾乱土及び後世の整地上であったため、地表面から深いところで約2mまで掘り下げ地山面を検出した。樹木がありそれ以上東側を調査できなかった。念のため埴堀を確認することにし、第7トレンチの東側に1か所追加して掘削した。

調査の結果は、令和3年6月8日付け3教文第82号で文化財保護法第99条第1項の規定により愛知県県民文化局長あて報告した。また、令和3年7月9日付け3教文第108号で街路計画課長あて回答した。



第3図 調査風景（第3トレンチ）

調査日誌抄

令和2年度（令和3年2月15日～2月26日）

2月15日（月）雨

重機搬入。フェンスの一部をとりはずす。

2月16日（火）晴

第1トレンチ 表土掘削。シルト層（地山）まで掘削する。湧水のため水中ポンプ入れる。土層断面図作成する。第2トレンチ 表土掘削。周溝検出する。濠の水抜き。

2月17日（水）晴

第2トレンチ 周溝掘削する。葺石検出する。

2月18日（木）曇時々雪

第2トレンチ 完撮写真撮影。土層写真・断面図作成する（降雪のため途中まで）。第3トレンチ 表土掘削。シルト面より石、埴輪片出土する。濠埋土の上位は現代のゴミ堆積、下位層に暗オリーブ灰色シルト堆積。濠斜面は明褐色粗砂、底面は淡青灰色砂。

2月19日（金）晴

第2トレンチ 土層断面図作成する。第3トレンチ 水抜き。

AM10:30より文化財調査委員会考古・埋蔵文化財部会調査指導。第1トレンチ 埋戻し・転圧する。

2月20日（土）晴

第2トレンチ 蔷石平面図作成する。第3トレンチ 濠北側のシルト層を掘削する。埴輪片等出土する。

2月22日（月）晴

第2トレンチ 平面図作成する。名古屋市科学館学芸員（当時、現愛知大学教授）西本氏による葺石の鑑定。第3トレンチ 平面図作成する。



第4図 調査風景（第2トレンチ）

2月23日（火祝）

休工。

2月24日（水）晴

第2トレンチ 菖石等養生後、埋戻し・転圧。第3トレンチ 水抜き、周濠北側の埴輪片、南側の菖石等出土状況平面図作成する。清掃、全景及び土層断面写真撮影後、土層断面図作成する。埋戻し。フェンス復旧。重機・器材搬出。

令和3年度（令和3年5月10日～6月4日）

5月10日（月）晴時々曇

第8トレンチ 東西6.0m×南北1.5m。昨年度の第2トレンチで検出した溝の延長部分検出。第7トレンチ 土層の再確認のため、第2トレンチを重複して設定し表土掘削。トレンチは樹木をはさんで東西に分かれる。

5月11日（火）曇

第8トレンチ 幅の狭い溝底で黒色土を検出。埴丘の裾部盛土と思われた。全景・土層写真撮影。土層断面図を作成する。第7トレンチ 埋め戻し土の掘削。菖石の検出。

5月12日（水）曇

第8トレンチ 土層図作成。第7トレンチ 全景写真。第7トレンチ（西）掘削。灰白色シルト層検出。写真撮影。第6トレンチ 表土掘削。浅黄色土検出。堀沿いは攪乱されていた。玉石や間知石出土。

5月13日（木）曇

第7トレンチ（西） 土層図作成。第6トレンチ 攪乱土掘削。第5トレンチ 菖石の予想地点3.5m×1.5mで設定したが、検出されず、南側に1.0m拡幅。灰白色シルト層検出。北壁断面に石を検出したため、北へ1.5m拡幅。菖石、埴輪検出。

5月14日（金）晴

第6トレンチ 土層図作成。北側に1.0×1.5m拡幅。第5トレンチ 菖石の検出。第4トレンチ 表土掘削。淡黄色土検出。菖石検出。樹木のため南と北に分かれる。

5月15日（土）曇

第6トレンチ（北） 掘削。土層図作成。第5トレンチ 黒褐色土の下の浅黄色土からも埴輪片出土。第4トレンチ 菖石検出。第4トレンチ（北） 東壁に沿ってサブトレンチ。菖石の転落石数個出土。第4トレンチの東側に拡幅する。第4トレンチ（東）。 表土掘削。菖石検出。

5月17日（月）雨

休工。

5月18日（火）曇 夕方雨

第5トレンチ 北端部分掘削。第4トレンチ 北端掘削。第4トレンチ（北） 写真撮影。第4トレンチ（東） 菖石検出。

5月19日（水）小雨後雨

第4トレンチ 菖石検出。第4トレンチ（北） サブトレンチ掘削。第4トレンチ（東） 菖石検出。午後休工。

5月20日（木）曇後雨

第4トレンチ 菖石検出、清掃。全景・土層断面写真撮影。第4トレンチ（東）菖石検出、清掃。午後休工。

5月21日（金）雨

水抜き作業。

5月22日（土）曇時々晴

第4トレンチ 清掃後全景写真撮影。土層図作成。第4トレンチ（北）清掃後全景写真撮影。第4トレンチ（東）葺石検出、清掃後全景写真撮影。土層図作成。第5トレンチ 清掃後全景写真撮影。土層図作成。終日水抜き作業。

5月24日（月）曇後雨

第4トレンチ 土層図作成。第6～第8トレンチの水抜き、泥取り作業。文化財調査委員会考古・埋蔵文化財部会調査指導。第8トレンチの淡黄色土は埴丘の盛土と思われていたが、黒色土のブロックが斑点状に入っていたことが判明する。写真測量後掘削予定。

5月25日（火）晴後曇

写真測量のため、各トレンチ清掃。10時から17時まで写真測量。第8トレンチ サブトレンチを入れる。

5月26日（水）曇

第8トレンチ 掘削。土層断面図作成。第4トレンチ 塙輪取り上げ。

5月27日（木）雨

休工。

5月28日（金）曇

第8トレンチ 土層図作成。第7トレンチ（東）設定。第5トレンチ 塙輪取り上げ。第4トレンチサブトレンチ土層写真撮影、土層図作成。第4トレンチ（北）サブトレンチ掘削。第4トレンチ（東）埴輪取り上げ。

5月31日（月）晴

第8トレンチ 写真撮影。第7トレンチ サブトレンチ追加掘削。第5トレンチ 塙輪取り上げ。第4トレンチ（北）土層写真撮影。氏子縦代会見学。

6月1日（火）晴

第8トレンチ 平面図等測量。第7トレンチ サブトレ土層断面図作成。第4トレンチ（北）土層図作成。埴輪取り上げ。第4トレンチ（東）全景写真撮影。第4トレンチ（北）、第6トレンチ埋め戻し。

6月2日（水）曇

境内埴丘北側エレベーション、盛土露出範囲測量調査。第7トレンチ、第8トレンチ埋め戻し。第7トレンチ（東）掘削。土層写真撮影。

6月3日（木）晴

境内埴丘西側エレベーション、盛土露出範囲測量調査。第4トレンチ（東）土層図作成。南区長、区政府部長視察。

第4トレンチ、第5トレンチ（東）、第7トレンチ、第7トレンチ（東）埋め戻し。

重機・器材等撤収。



第5図 調査風景（第8トレンチ）



第6図 調査風景（第4トレンチ（東））

第2章 位置と環境

1 位置

桜神明社古墳は、愛知県名古屋市南区呼続四丁目に所在する、神明社の境内にある。墳丘頂部に本殿が鎮座し、南側の墳裾部に拝殿が造られている。神明社境内は、拝殿や社務所から拝殿に通ずる廊下を境に、南側に社務所、鳥居、手洗い、灯籠、石碑など神社施設が配置され、廊下や塀で仕切られた北側は樹叢地となっている。かつては笹が生い茂り、ゴミが散乱していたそうで、氏子の手により刈り取られ、清掃されて現在は古墳の姿をよく見ることができる。

神明社は、呼続四丁目に所在しているが、かつての桜村の氏神の一つである。桜村にはもう一つ、東方に八幡社が氏神として祀られている。神明社は、他の神明社と区別するため桜神明社と呼ばれている。

桜の名前は、古くは万葉集（巻三雑歌271）に高市連黒人の桜田の古歌「桜田部 鶴鳴渡」さくらだべ たづなきわたらる あゆちがた
塙千二家良之しづのにけらし 鶴鳴渡たづなきわらる 年魚市方ひるひきみち 佐久良さくらう 正字よし 狹座さくざの義なるべし。佐は狭くなり久良は小高く座る所なるをいふ。関東にて台タメ 国府台金川台こくふだいがねがわだい と呼に等し。此地北より南へ星崎まで細長き平山にて村落は座にあり。丹羽郡の長桜村も義是に同じ。和名作良と書たるも填字なり」と述べる。細く連なった台地のことをさくらと呼んだと考察されている。台地上には松の巨木が多く、熱田あたりから眺めると、呼続浜の向こうに島のように見えたことから松島とも呼び、桟敷山とも称した（文献73）。

近世の桜村は、集落は塙付街道沿いに本郷があり、南に分野、東に迎ひ山、六本松、大地欠と四つの小集落があった。桜村は、明治11年（1878）12月28日に山崎村、新屋敷村、戸部村と合併して愛知郡千窟村になり、明治22年（1889）10月1日に千窟村と豊田村が合併して愛知郡呼続村大字千窟となった。明治30年（1897）7月12日に呼続町、大正10年（1921）8月22日南区呼続町となった（文献29）。

桜村の名前は町村合併により無くなってしまったが、桜の名前は桜台町、桜本町、西桜町、元桜田町のように現在の町名や桜小学校、桜台高校などに引き継がれ、こんにちでも地域に溶け込んだ名前として親しまれている。



第7図 位置図 S=1:25000 地形図 名古屋南部 国土地理院 ●印 桜神明社古墳

2 歴史的環境

旧石器時代～縄文時代草創期

笠寺台地では、見晴台遺跡から角錐状石器が1点出土している。この石器は、およそ25,000年前に噴出堆積した姶良丹沢火山灰層の上位から、ナイフ形石器と共に出土する。本来は西日本で使用された石器のようで、国府型ナイフ形石器とともに東方へ伝播したと考えられている。市内では熱田区玉ノ井遺跡、瑞穂区大曲輪遺跡で出土している。

縄文時代

笠寺台地では、見晴台遺跡の南方に、市場遺跡（晚期前半）、下新町遺跡（晚期後半）、本城町遺跡（晚期）、船橋貝塚（早期後半）がある。見晴台遺跡では、台地南東の低地部で晚期の貯蔵穴がみつかっている。台地上では、縄文土器の出土は少ないが、舟底状のピットが見つかっている。遺物を含まないため、時期は不明であるが、縄文時代以前の可能性がある。東方の天白川対岸の鳴海丘陵西縁には、上ノ山貝塚（早期後半・前期初頭）、鉢ノ木貝塚（早期後半・前期中頃）、大根貝塚（前期前半）、丘陵に清水寺遺跡（前期・中期）、光正寺貝塚（中期後半）、雷貝塚（晚期）がある。

弥生時代

笠寺台地では、前期は条痕文系土器が下新町遺跡から出土するが、遠賀川系土器の出土は知られていない。中期は下新町遺跡、見晴台遺跡（中期末）の北方に、東郷梅遺跡（中期末）がある。後期には、見晴台遺跡、桜台高校遺跡、六本松遺跡、桜田貝塚・貝塚町遺跡、桜小学校遺跡、扇田町遺跡など遺跡数が増えた。環濠集落としては、見晴台遺跡、桜田貝塚・貝塚町遺跡、鳴海丘陵の三王山遺跡、城遺跡、山崎川対岸の瑞穂遺跡が知られている。

古墳時代

笠寺台地では、見晴台遺跡で前期の竪穴住居跡が出土し、弥生時代以降も居住地であった。中期以降は規模縮小の傾向がある。周辺の集落跡は、桜本町遺跡、扇田町遺跡、曾池遺跡、春日野町遺跡、呼続遺跡などが知られる。古墳は、桜神明社古墳のほか、鳥栖八剣社古墳、鳥栖神明社古墳、野屋古墳が知られている。六本松遺跡では方形周溝墓（方墳）、扇田町遺跡で古墳の周溝が出土している。鳥栖八剣社古墳、桜神明社古墳、鳥栖神明社古墳の3古墳は笠寺台地を支配した首長が葬られた古墳であろう。このほか明治17年の地籍図を見ると、笠寺台地西南部に「塚」と表記のある地割りがいくつか見受けられる。これらは中世以降の可能性もあるが、古墳であった可能性もある。

古代・中世

笠寺台地では、桜本町遺跡、桜台高校遺跡、六本松遺跡、曾池遺跡、見晴台遺跡などがある。特に桜本町遺跡では、掘立柱建物跡、竪穴住居跡が出土し作良郷との関わりで注目されている。見晴台遺跡では、古代の竪穴住居跡が出土し、須恵器、灰釉陶器、古瀬戸、山茶碗、古銭などが出土する。

見晴台遺跡の西に小谷をはさんで立地している笠覆寺（笠寺觀音）は、奈良時代の前身寺院小松寺が南区船島三丁目、船島貝塚の地付近に所在した。明治17年（1884）の地籍図から、南側の東西道路に面していたのではないかと推定される。延長8年（930）藤原基経の子兼平とその妻、玉照姫が現在地に笠覆寺を建立した。その後荒廃したが、嘉祥4年（1238）に再興し、現在に至る。中世には12坊の塔頭寺院があったとされる。現在、西福院、西方院、泉増院、東光院が法灯を守っている。今日に見る笠覆寺の堂宇は、江戸時代の建立で、『尾張名所図会』に描かれた境内地の様相を今に伝えている。見晴台遺跡で出

土する古代から中世にかけての遺物は、笠覆寺との関係が推察されている。

近世

桜神明社の西にある富部神社は、かつては蛇毒神社と呼ばれていた。慶長8年（1603）、松平忠吉により素戔鳴尊を祀る祠を現在地に移したとも、津島神社より牛頭天王を勧請したともいわれている。現在の社殿は、慶長11年（1606）に建てられたもので、桃山様式の建築として国重要文化財に指定されている。笠寺台地を東海道が通る。笠寺一里塚は、市内で現存する唯一の一里塚である。見晴台遺跡では、近世には畑地として利用されていたため、遺物は少ないが、土棒と呼ぶ円柱状の土製品が出土している。これは製塙の窯に使用されたものと考えられている。伊勢湾に面する近傍の星崎七ヶ村では、19世紀中頃まで製塙が行なわれ、慶長13年（1608）には合わせて95.5haに及んでいた。星崎の塩は、戸部村、桜村、新屋敷村、星崎村を経て、古井村に至る塩付街道を利用して各地に運ばれた。

近代

大正末期から昭和初期にかけて、耕地整理組合が設立され、道路が新しく造られた。この耕地整理事業により東郷梅遺跡が発見されている。昭和にはいると、笠寺台地西方の水田地帯や海岸埋立地には重工業や化学工業、繊維工業などの工場が立地し、南部臨海工業地帯を形成していった。これらは、満州事変以降兵器製造などの軍需工業として発達した。

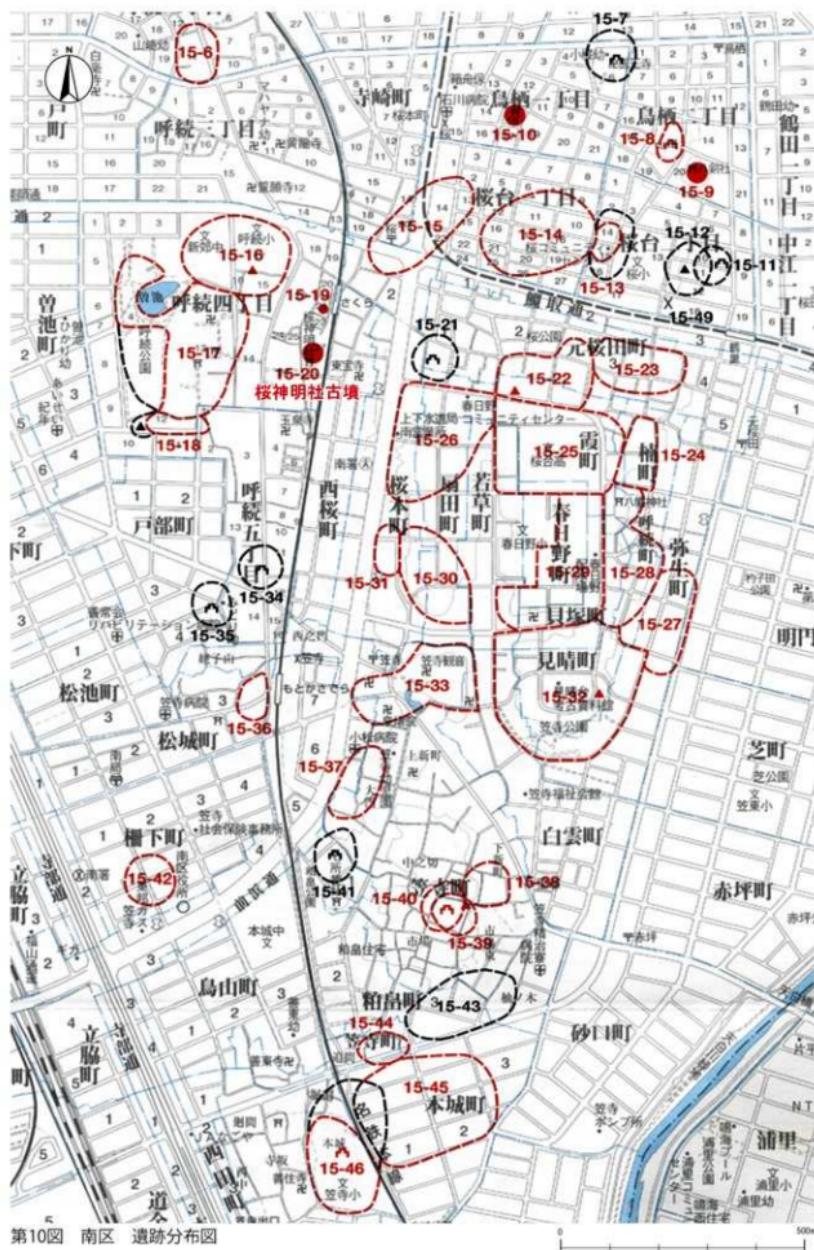
昭和14年（1939）に第二次世界大戦が起きた。昭和15年に陸軍により閻特演（関東軍特殊演習）が満州において計画されるなか、ソ連による渡洋爆撃に対する警戒が高まっていた。昭和16年7月には要地上防空部隊が京浜地区、阪神地区などに配置された。名古屋では、名古屋防空隊が発足した。昭和17年には笠寺（見晴台遺跡）、柴田などに高射砲陣地が設営された。これらの高射砲陣地は、熱田神宮や南部工場地帯の防衛が目的であった。見晴台遺跡では、現在も砲座が残り、発掘調査においても遺構や遺物が出土する（文献58）。



第8図 富部神社よし祭



第9図 桜田勝景碑

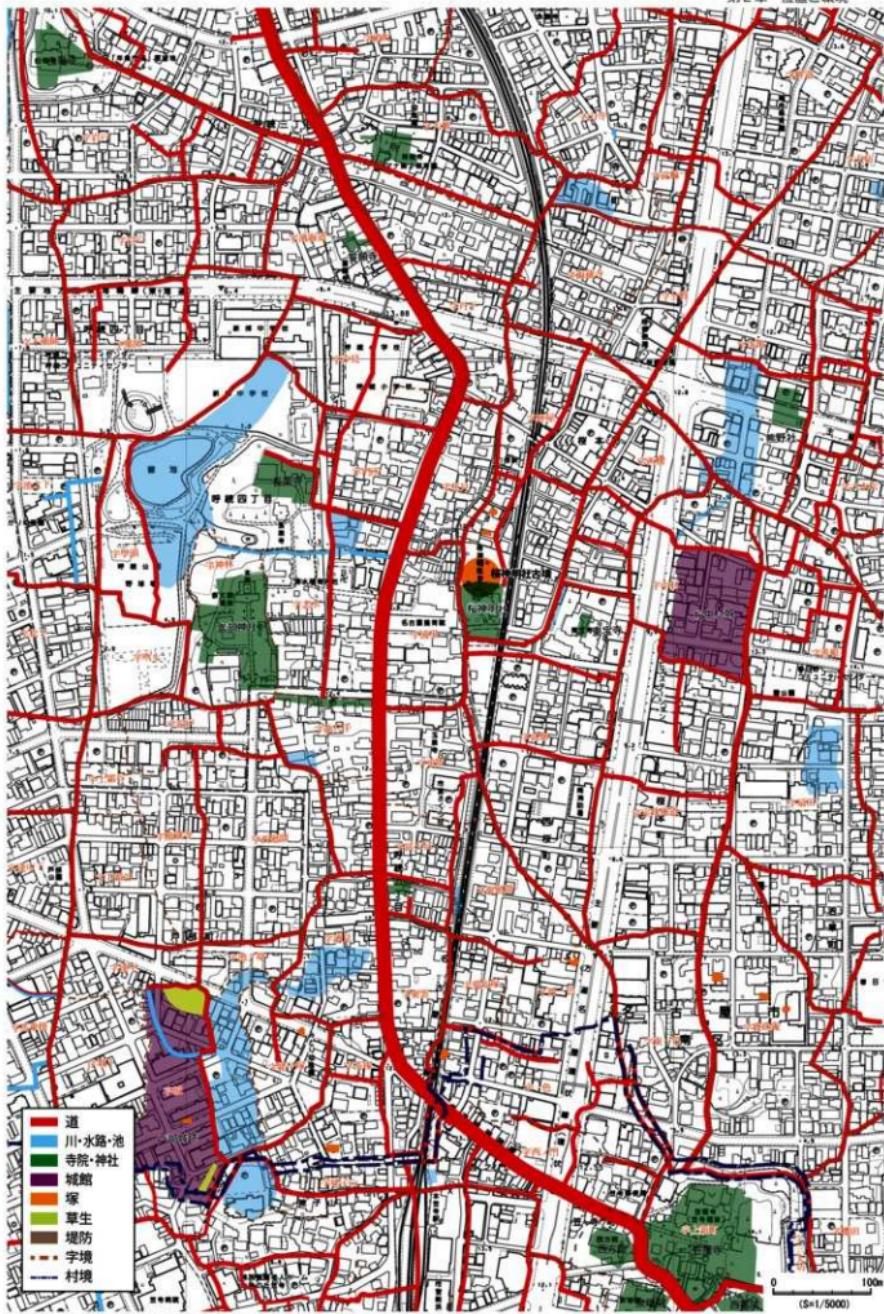


第10図 南区 遺跡分布図

表1 周辺の遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名称	種別	時代						
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	戦国	近世
1	塩上町遺跡	散布地		○	○		○		
2	新屋敷貝塚	貝塚	○						
3	山崎遺跡	貝塚		○	○				
4	山崎城跡	城跡						○	
5	山崎町2丁目遺跡	散布地		○			○		
6	山崎町3丁目遺跡	散布地			○	○	○		
7	新屋敷西城跡	城跡						○	
8	新屋敷鳥栖城跡	城跡						○	
9	鳥柄八剣社古墳	古墳				○			
10	鳥柄神明社古墳	古墳			○				
11	桜大寺掛北城跡	城跡						○	
12	東郷梅遺跡	貝塚		○	○				
13	桜小学校遺跡	散布地		○					
14	桜台町遺跡	散布地・集落		○	○				
15	桜本町1丁目遺跡	散布地		○	○				
16	呼続遺跡	集落・貝塚		○	○	○	○		
17	曾池遺跡	散布地・貝塚	○	○	○	○	○		
18	戸部町遺跡	集落・貝塚				○	○		
19	野屋古墳	古墳				○			
20	桜神明社古墳	古墳				○			
21	桜中村城跡	城跡						○	
22	六本松遺跡	集落・貝塚		○	○	○			
23	元桜田町遺跡	散布地		○	○			○	
24	楠町遺跡	集落・散布地		○	○	○	○		
25	桜台高校遺跡	集落・散布地		○	○				
26	桜本町遺跡	集落		○	○	○			
27	弥生町遺跡	散布地					○		
28	桜田貝塚・貝塚町遺跡	貝塚・散布地		○	○	○	○		
29	春日野町遺跡	散布地	○	○	○				
30	扇田町遺跡	集落・散布地		○	○	○	○		
31	桜本町低地遺跡	散布地		○	○	○	○		
32	見晴台遺跡	集落・貝塚	○	○	○	○	○		
33	笠寺觀音遺跡	散布地		○	○				○
34	戸部一色城跡	城跡					○	○	
35	戸部城跡	城跡						○	
36	松城町遺跡	散布地				○			
37	大門遺跡	散布地			○	○			
38	下新町遺跡	散布地	○	○	○	○	○		
39	市場遺跡	散布地・貝塚	○	○	○	○	○	○	○
40	市場城跡	城跡						○	
41	寺部城跡	城跡						○	
42	柵下町遺跡	散布地				○	○		
43	柏島遺跡	散布地・貝塚	○	○		○	○		
44	廻間遺跡	散布地				○	○		
45	本城町遺跡	散布地	○	○	○				○
46	星崎城跡	城跡						○	
47	宮西遺跡	散布地					○		
48	南野町遺跡	製塙遺跡					○	○	○
49	桜経塚	経塚							○
50	紀左衛門新田堤	堤防							○

第10図の範囲に含まれていない遺跡も掲載しています。



第11図 明治17年地籍図と現代の地図を重ねた図

使用地図 1:2500名古屋都市計画基本図(新瑞端・笠寺)、地籍図：愛知郡千種村 愛知県公文書館所蔵 (注)地図精度が異なるため場所によってずれが生じています。



第12図 昭和11～14（1936～1939）年頃の空中写真（旧日本軍撮影 B-13 78）国土地理院所蔵



第13図 桜神明社古墳全体測量図

第3章 遺構

1 令和2年度 試掘調査

第1トレンチ

地表面の標高12.45～12.80mを測る。境内より約0.5m低い。地表面から0.7mまで表土層で、現代の陶磁器、ガラス瓶が多く含んでいた。0.7～0.78mまで灰色シルト（4層）、0.78～0.9m（掘削深）まで灰黄色シルト層（5層）である。4、5層は地山（基盤層）と考えられ、標高12.1～12.2mである。遺構はなく、地山面が削平され、下位のシルト層が露出していると推定される。明治17年の地籍図では、道が境内の脇を通り、当地に該当する。近世以前の遺物は出土していない。

第2トレンチ

墳丘の東裾から境内地東端に向けて東西方向に掘削した。トレンチ西端の墳丘裾部では、掘削深0.4～0.7m下で葺石を検出した。葺石は5×5cm～5×10cm前後の円礫でチャートである。段丘内に含まれるチャートを採取してきたようで、表面が白色化している（名古屋市科学館 学芸員西本昌司氏による鑑定）。葺石は約10度の傾斜面に葺かれている（標高13.4～13.6m）。西端から1.9mまで葺かれている。当初はトレンチの西端から0.5mまでは、検出していなかったが、ピンボールを刺したところ石にあたるので、南壁際を掘削して葺石を確認した。

葺石が検出された東側で約2.7mの幅で溝が検出された。溝の埋土と盛土がよく似ていたため、墳丘の裾について2案が考えられる。①案 第16図土層図25層までを墳丘とした場合、傾斜は、約70度の急こう配である。②案 24層までを墳丘とした場合、傾斜は30度となる。24層の下位に溝状遺構（27層）があり、墳丘設計のためコンパスのように円弧を描いた痕跡とすると、墳丘裾となる。溝の深さは東肩から約45cm、葺石側から約70cm、底面の標高は12.64～12.68mである。地山（基盤層）は、淡黄色砂質土で、上位の地山（橙黄色砂シルト）は検出されなかった。（注）令和3年度の調査で溝は表土・攪乱土であることが判明した。

淡黄色砂質土は、墳丘下にまで続いていくよう、墳丘を構築するにあたり、上位の地山（橙黄色砂シルト）を削平した後に構築したようである。盛土の崩落土に橙黄色砂シルトがある。

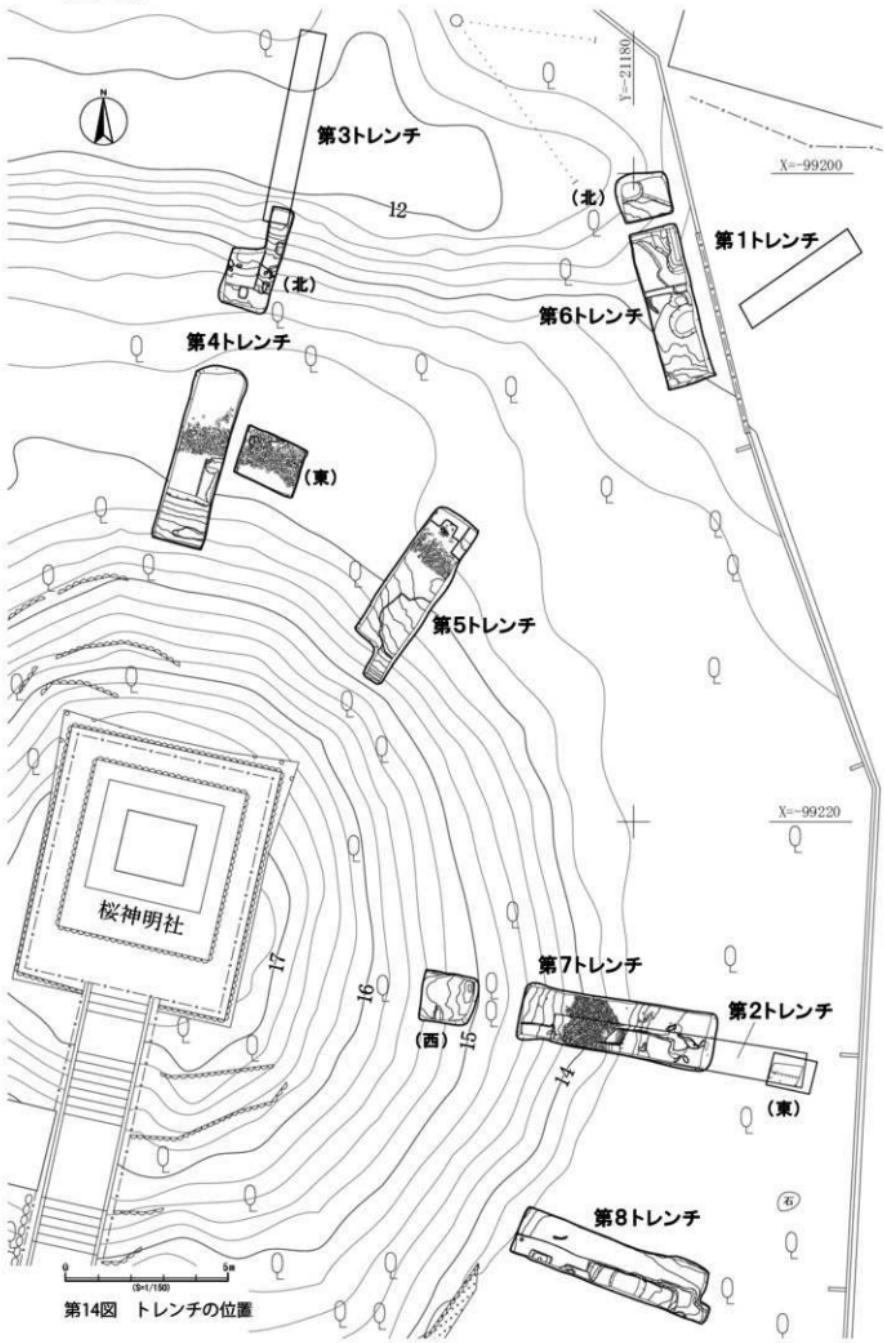
遺物は、葺石検出面に埴輪、溝内から埴輪、中世陶器（常滑焼甕）が出土した。いずれも小片である。

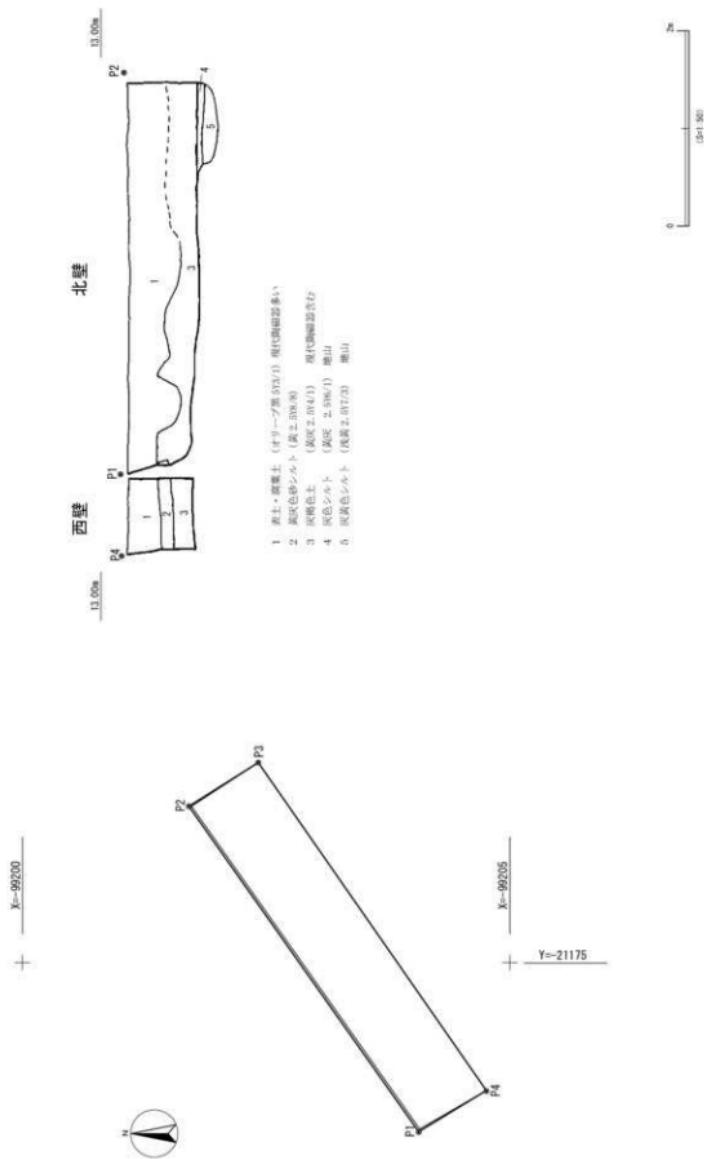
溝の東側は、平坦でトレンチ東端で南北方向の溝が検出された。幅約35cm、深さ約15cmある。近世陶器が出土した。

第3トレンチ

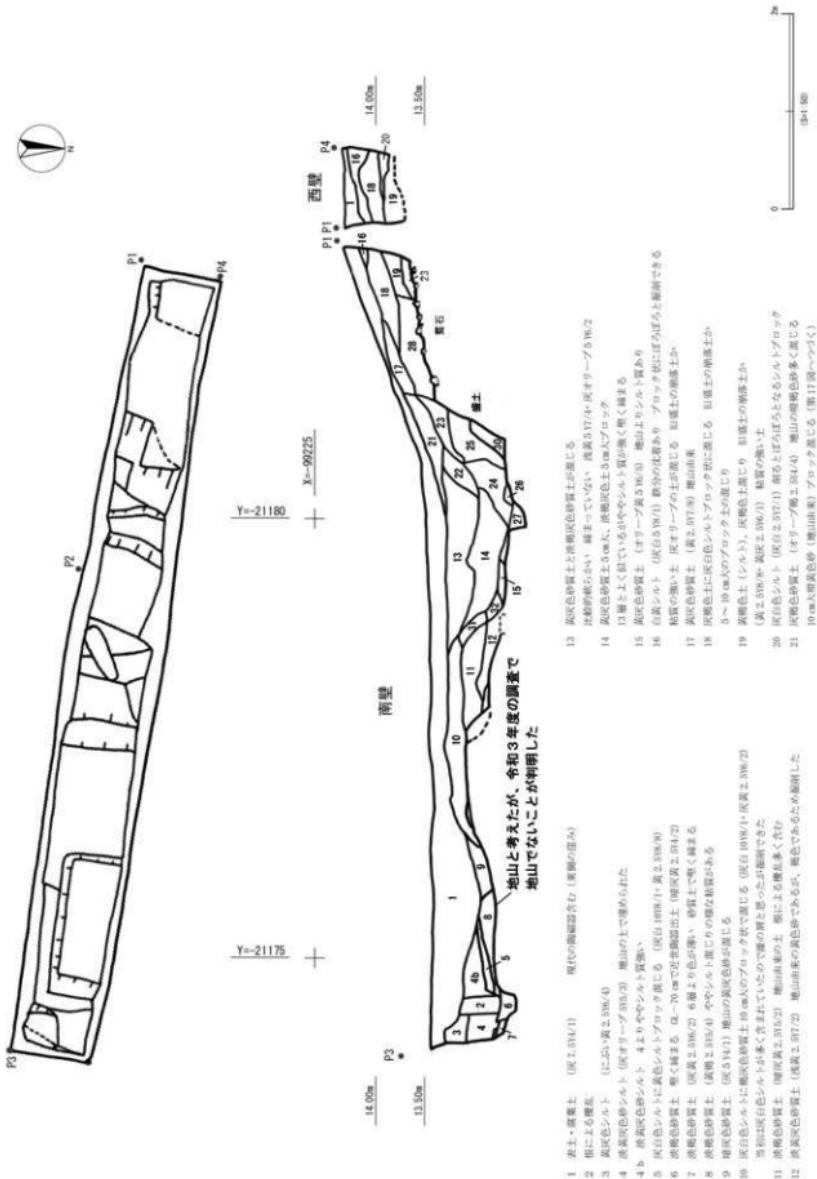
現在みることができるL字状に掘られた北側の溝（濠）部分に設定した。トレンチの南端は、表土が約70cm堆積し、灰色シルト面で石（チャート）、埴輪が出土した。灰色シルト層は薄く堆積しており、灰白色シルトの基盤層（地山）に至る。灰白色シルトの標高は、11.7mである。

溝（濠）は、幅約4.0m、深さ約0.6mを測る。底面の標高は11.0mを測る。溝（濠）の埋土は、上位は表土で現代の陶磁器、ガラス瓶、玩具（自動車（ボルシェ））などが含まれていた。溝（濠）の南半に暗オリーブ灰色シルトが残存しており、北半は攪乱を受けていた。氏子の話によれば、溝（濠）を掘り直したことなので、幅が広くなった可能性が高い。溝（濠）内から埴輪は出土しなかった。





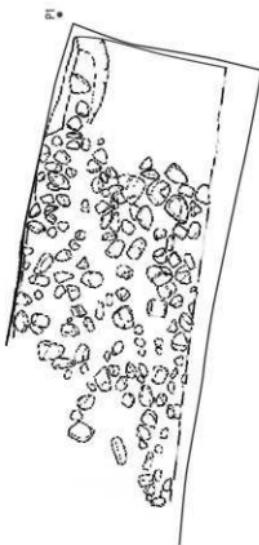
第15図 第1トレンチ平面図・土層断面図



第16図 第2トレンチ平面図・土層断面図



Y-21183



(図版の説明)

- 22 塗灰褐色土 (灰質 2.387/20 砂質土 天然色シルト質 沈没色シルト少し面し面に
ほり立つた土。
23 塗灰褐色土 (灰質 2.387/20) 塗粉色が強く、鉛錆色い
24 塗灰褐色土 シルト質地、川原 1層含む。鉛錆色い
25 塗灰褐色土 (灰質 2.387/20) 沈没土 (鉛錆色) 天然色シルト少しある
26 塗灰褐色土 (灰質 2.387/20) 沈没土 (鉛錆色) ドロゴラク付む
24層に沿ひたためたが、上で断面が出土したためめた。
27 塗褐色土 (灰質 2.387/20) 砂質土 黄褐色など混じる
28 塗褐色土 (シルト質) ばらけ立とした感じ。黄色土、沈没色など混じる
29 塗褐色土 (シルト質) 黒みの強い土。鉛錆色の塊、青色入る
30 沈没色土 (灰質 2.387/20) 沈没土。灰く細まる。海辺土
31 沈没褐色土 (灰質 2.387/4) 砂質土 10層ほどブロックが多かったが、21層は砂質土

(図版の説明)

- 22 塗灰褐色土 (灰質 2.387/20) 砂質土 天然色シルト質 沈没色シルト少しそうし面に
ほり立つた土。
23 塗灰褐色土 (灰質 2.387/20) 塗粉色が強く、鉛錆色い
24 塗灰褐色土 シルト質地、川原 1層含む。鉛錆色い
25 塗灰褐色土 (灰質 2.387/20) 沈没土 (鉛錆色) 天然色シルト少しある
26 塗灰褐色土 (灰質 2.387/20) 沈没土 (鉛錆色) ドロゴラク付む
24層に沿ひたためたが、上で断面が出土したためめた。
27 塗褐色土 (灰質 2.387/20) 砂質土 黄褐色など混じる
28 塗褐色土 (シルト質) ばらけ立とした感じ。黄色土、沈没色など混じる
29 塗褐色土 (シルト質) 黒みの強い土。鉛錆色の塊、青色入る
30 沈没色土 (灰質 2.387/20) 沈没土。灰く細まる。海辺土
31 沈没褐色土 (灰質 2.387/4) 砂質土 10層ほどブロックが多かったが、21層は砂質土

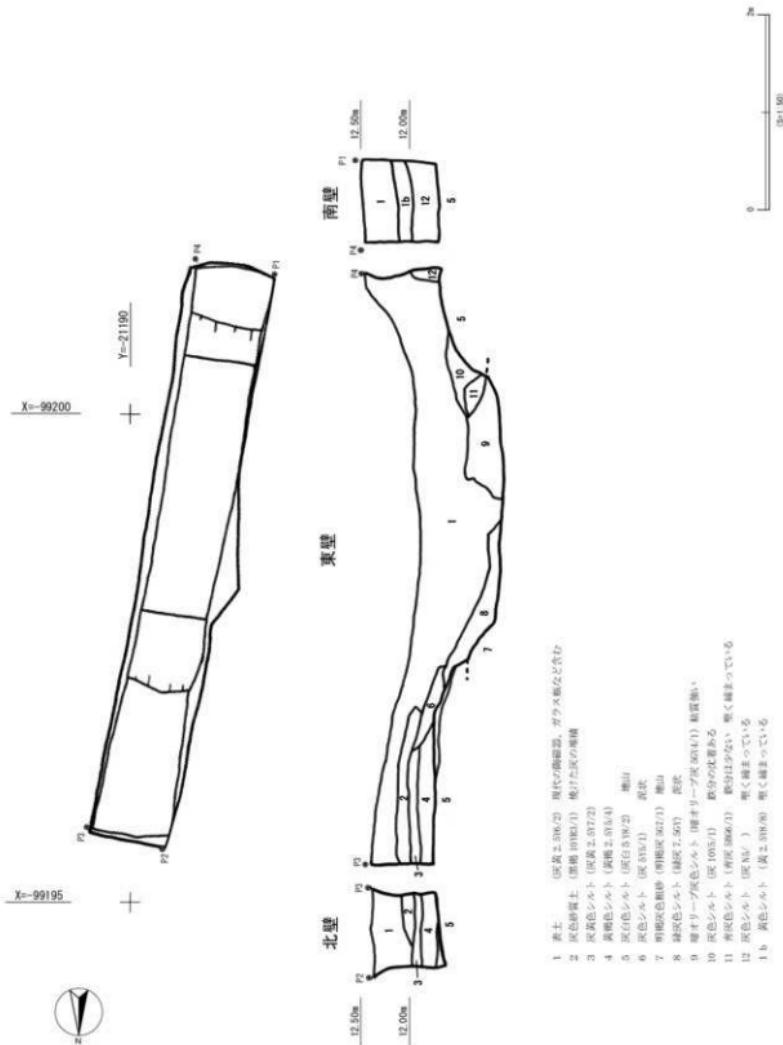
第17図 第2トレンチ平面図(墓石出土状況)

P.

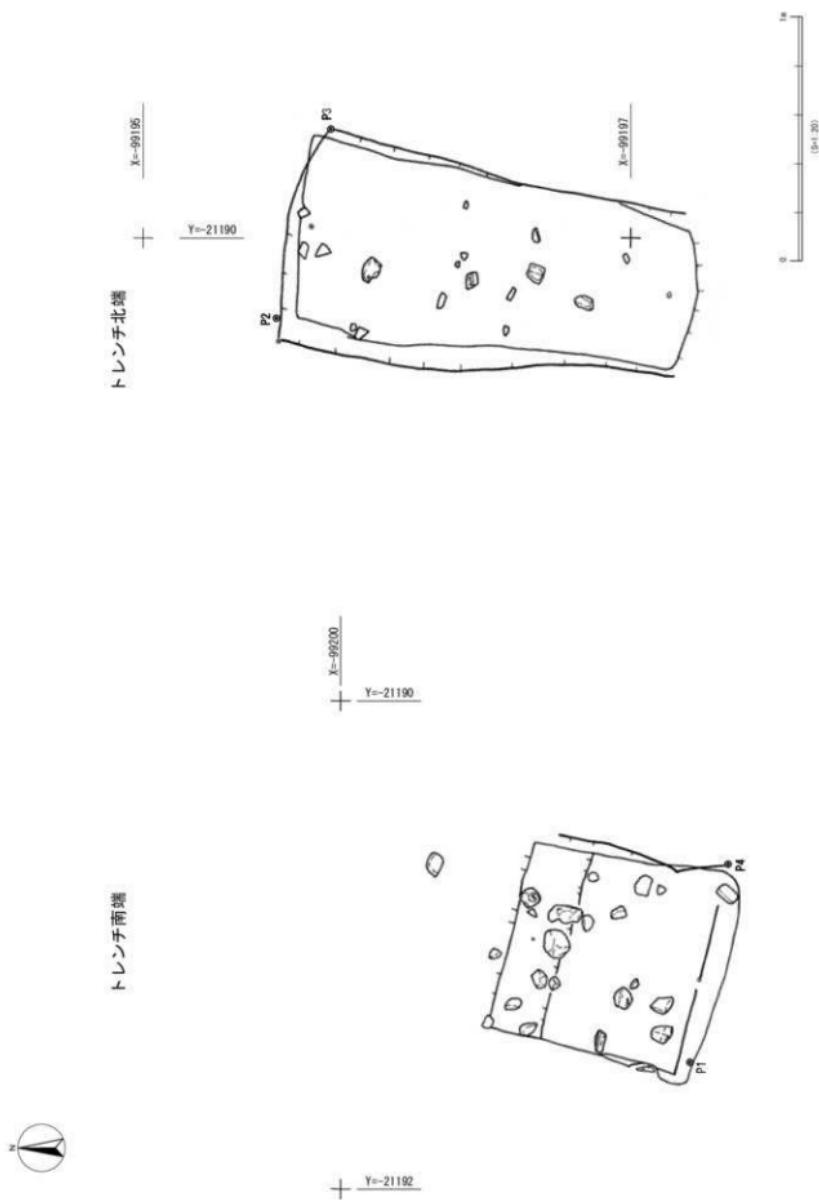
— 19 —

Y-21180
X-99225

(1m 20cm)



第18図 第3トレンチ平面図・土層断面図



第19図 第3トレンチ平面図（墓石と埴輪の出土状況）

溝(濠)の北側は、灰白色シルトが基盤層(地山)となり、標高11.7mである。基盤層上面で石(チャート)、埴輪が出土した。埴丘の北側は平坦地で、転落した埴輪が散乱した後に埋まっていたところを掘削して溝(濠)を造ったものと考えられる。古墳に伴う周溝は確認できなかった。

2 令和3年度 試掘調査(その2)

第4トレンチ

南北5.5m×東西1.5mの範囲で掘削した。本殿の真裏、2年度の第3トレンチの南に延長した位置にある。現地表面で標高14.8mの埴丘の裾から、標高13.8mの平坦面にかけて掘削した。中央より北寄りで葺石が出土した。南北間1.0mの幅に集中し、積み重なった状況である。葺石の間から埴輪小片のほか土器片が出土した。葺石は黒褐色粘質土内に含まれており、埴丘上位から転落した状況と考えられる。

写真測量後、東壁に沿ってサブトレンチをあけて、葺石の下の状況を観察したところ、緩やかな傾斜面に堆積した状況で、埴輪据えつけ痕跡も確認できなかった。調査区南端から1.5mまではやや傾斜のついた盛上で、そこから北はやや緩やかな傾斜面となる。東壁際、葺石の検出された南側に南北0.5m、東西0.5m以上的小穴が検出されたが、出土した陶器から近世以降のものと推定される。

第4トレンチ(北)

第4トレンチの北側は木の根があるため、2.1m離して南北東辺3.35m(西辺1.7m)×東西南辺1.7m(北辺0.9m)の範囲で掘削した。北端は第3トレンチの南端部分と重複する。地表面の標高13.6mから12.4mで、北側の溝(濠)の肩にあたるため急斜面となっている。

掘削した結果、第4トレンチ北端から続く傾斜で下がっており、北端は後世の掘り込みで攪乱されていた。埴丘裾に巡る周溝は検出されなかった。葺石の転石、埴輪片が数点出土した。埴丘裾は、第22図中23層と25層の境から北側が平坦となる位置と考えられる。

第4トレンチ(東)

第4トレンチの東側0.5m離して南北1.5m×東西2.0mの範囲で掘削した。このトレンチは、埴丘が円墳であることを確かめるため、埴丘裾の葺石が円弧を描いて出土することを予想したものである。葺石は、予想をこえて調査区北端までの南北幅1.0~1.2mで出土した。葺石の間で埴輪片が出土した。また葺石と同じ黒褐色土より須恵器長頸瓶の底部片が出土したことから、葺石の転落した時期は古代と推定される。

第5トレンチ

第4トレンチと第7トレンチの中間位置に、南北東辺5.7m(西辺4.5m)×東西1.70m(南辺0.7m)で掘削した。当初は南北長3.0mで掘削したが、葺石が検出できず、南側にサブトレンチ状に掘削したが同様に埴丘の土を検出するのみであった。ところが、北壁断面を精査したところ、石が並んで検出されたため、北側に拡幅した。

その結果、葺石を検出した。葺石の転石がとぎれたあたりで、比較的大きな埴輪片が出土した。この埴輪の出土層位は、葺石の含まれる黒褐色土の下位に堆積した土で、葺石の転落以前に埋まったようである。埴輪は、沈線が巡り、その形状から蓋形埴輪と推定された。

第6トレンチ

第5トレンチの北東約7.0mの位置に神社境内の塀に沿って、南北4.7m×東西1.5mの範囲で掘削した。



第20図 トレンチ位置集成写真

この調査区は、現存する溝（濠）の東端、延長部にあたり、溝（濠）が東方あるいは南方へ曲がっていくのかを明らかにすること、第7トレンチ、第8トレンチで検出した溝状遺構がこの溝（濠）とつながるかを明らかにする目的で設定した。

調査区の南半は、近年の擾乱により大きく掘られていた。石垣に使用したような石材を含んでおり、塀の改築による時期頃のものと思われる。北半の西壁寄りは比較的高い位置で地山を検出した。一方、東壁側北端も擾乱されており、玉石（川原石）が出土した。そのため、北側にも第6トレンチ（北）を設定した。

第6トレンチ（北）

南北1.2m×東西1.5mで掘削したところ、北に下がる地山を検出した。埋土は現代の土であった。また北西端は一段と深い穴が掘られて、汽車土瓶が出土した。この穴は、溝（濠）の一部と考えられる。第6トレンチ、第6トレンチ（北）では、古墳にかかわる埴丘埋土、周溝、葺石の転石、埴輪などは検出されなかった。

第7トレンチ

埴丘の裾について、改めて確認するため、令和2年度の第2トレンチの一部と重複して設定した。南北1.7m×東西6.0mで掘削し、2年度に検出した葺石及びその北側でも葺石を検出した。埴丘の上方へもさらに葺石が続くものと考えていたが、2年度に検出した葺石より西側では検出されなかった。

葺石の西側の南壁土層では、6.0cmの厚さで黒褐色シルト、黄褐色シルト、黄灰色シルト、明黄褐色シルトの堆積が確認された（第26図P1-P2間6~9層）。

東側斜面では、転落石が検出された。2年度に検出した溝状遺構は、第8トレンチで再掘削したところ埋め立てた土であることが判明したので、第7トレンチにおいても一部を掘削し、後世の埋戻し土や埴丘の土が確認された（第27図P8-P9間2~8層）。

第7トレンチ（西）

第7トレンチの西側は、樹木があるため1.5m離して南北1.5m×東西1.7mで掘削した、土層観察により、東壁、北壁で盛土を確認した。第7トレンチ南壁と同様に、厚さ6.0~10.0cmの異なる土を何層にも積み上げていた。南壁では0.5mの厚さで黄褐色砂質土が堆積しており、後世の埴丘修築と考えられる。

第7トレンチ（東）

第7トレンチの東側に南北1.0m×東西1.6mで掘削した。このトレンチは、第8トレンチの再掘削により、埴丘裾部が地表下2.0mにあることが確認されたが、樹木のため周溝の有無を明らかにすることができなかった。そのため、第7トレンチの東側、塀との間にトレンチを設定した。結果、地表下1.9mで地山面を検出し、葺石の転落石も出土した。狭い範囲であったが、地山面はやや東に傾斜が認められるもののおおむね平坦である。第8トレンチと同様な結果を得た。埴丘裾は、第4トレンチ、第8トレンチの埴丘裾推定位置から、調査区の西端付近と推定される。

第8トレンチ

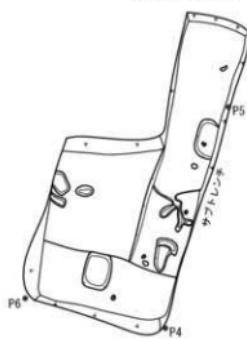
この調査区は、2年度の第2トレンチで検出した溝状遺構が南に続いているかを確認するために南北1.5m×東西6.0mで掘削した。結果、中央付近で溝を検出し、その西側は平坦面が形成されており、埴丘の盛土と考えていた。しかし後に、黒色土のブロックが混じっていることから、後世の土と考えるに至った。そのため、南壁に沿って深掘りした。

南壁東半の層序は表2のとおりである。

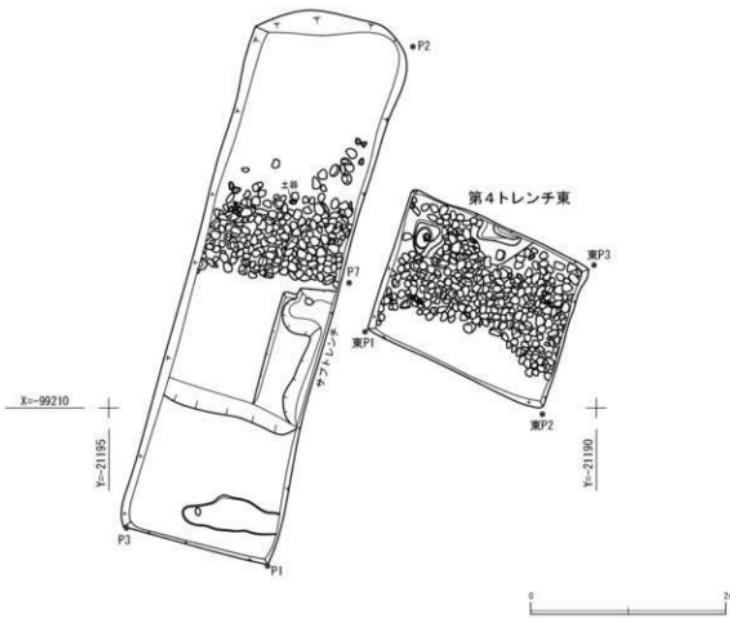
X=99200 + -



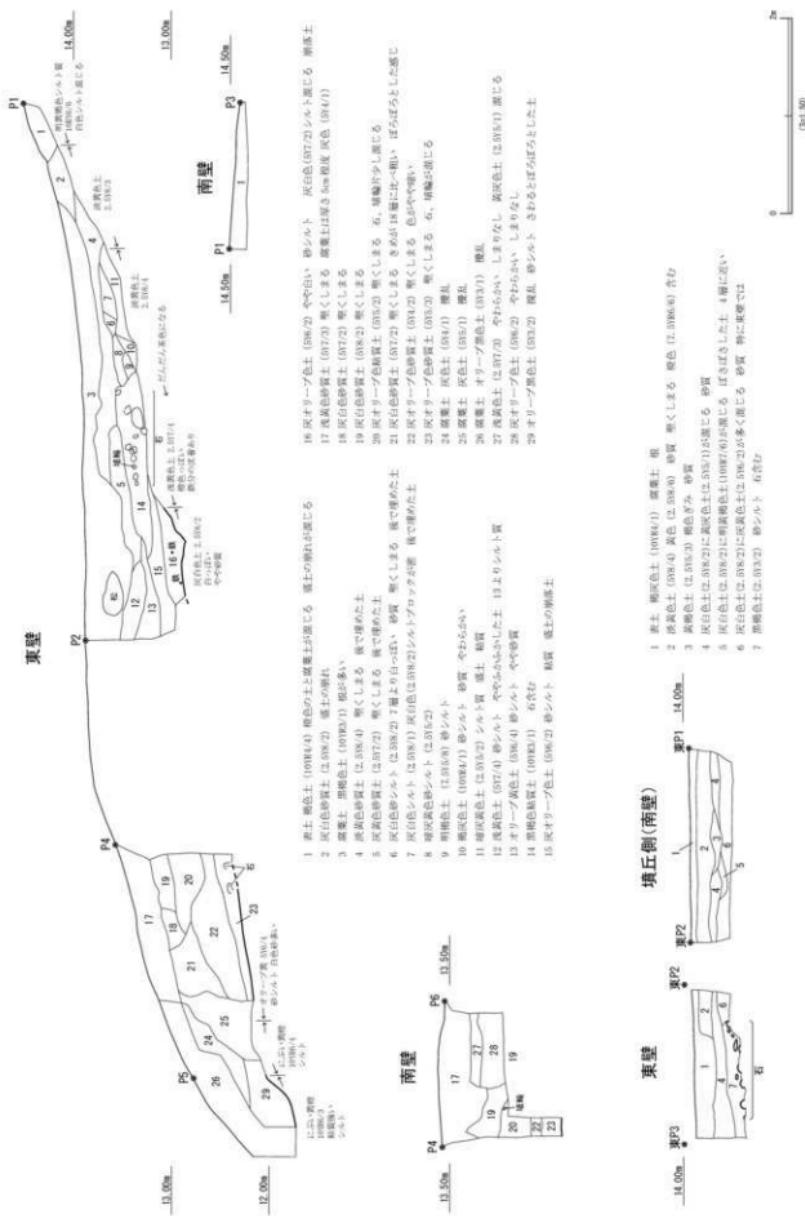
第4トレンチ北



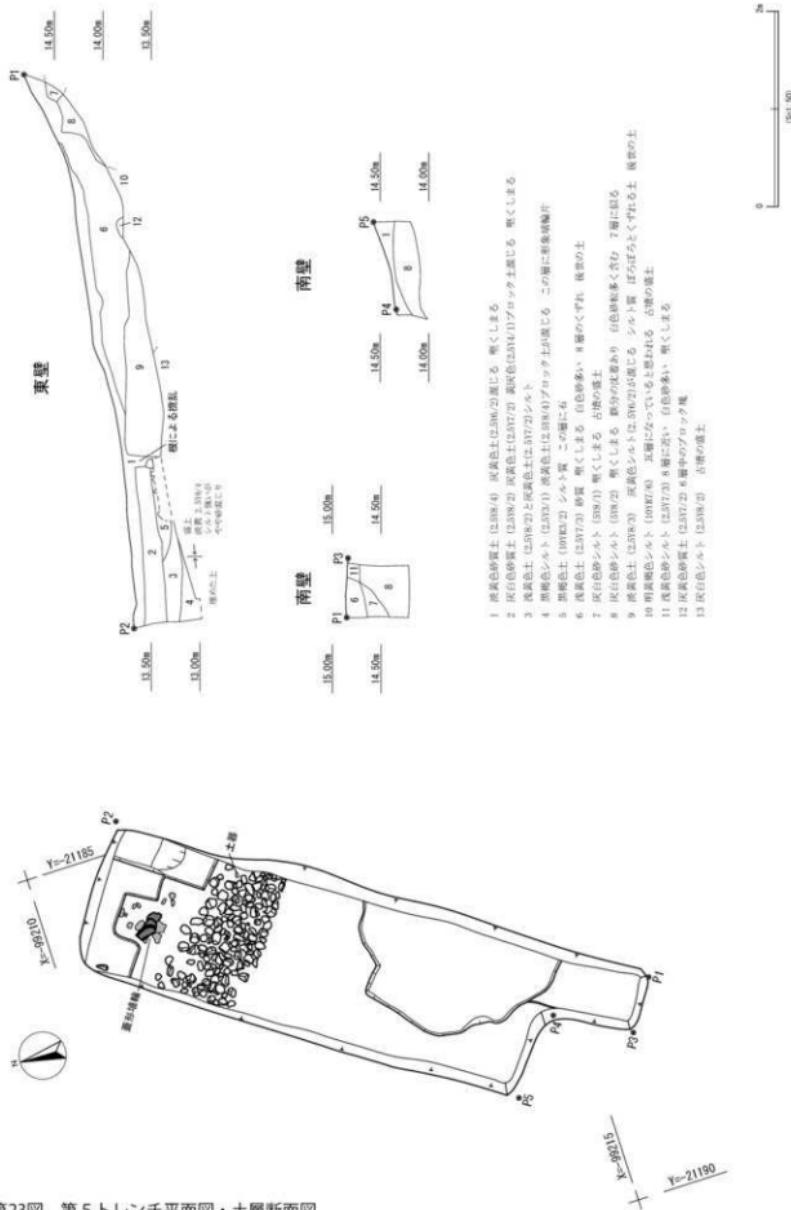
X=99205 + -



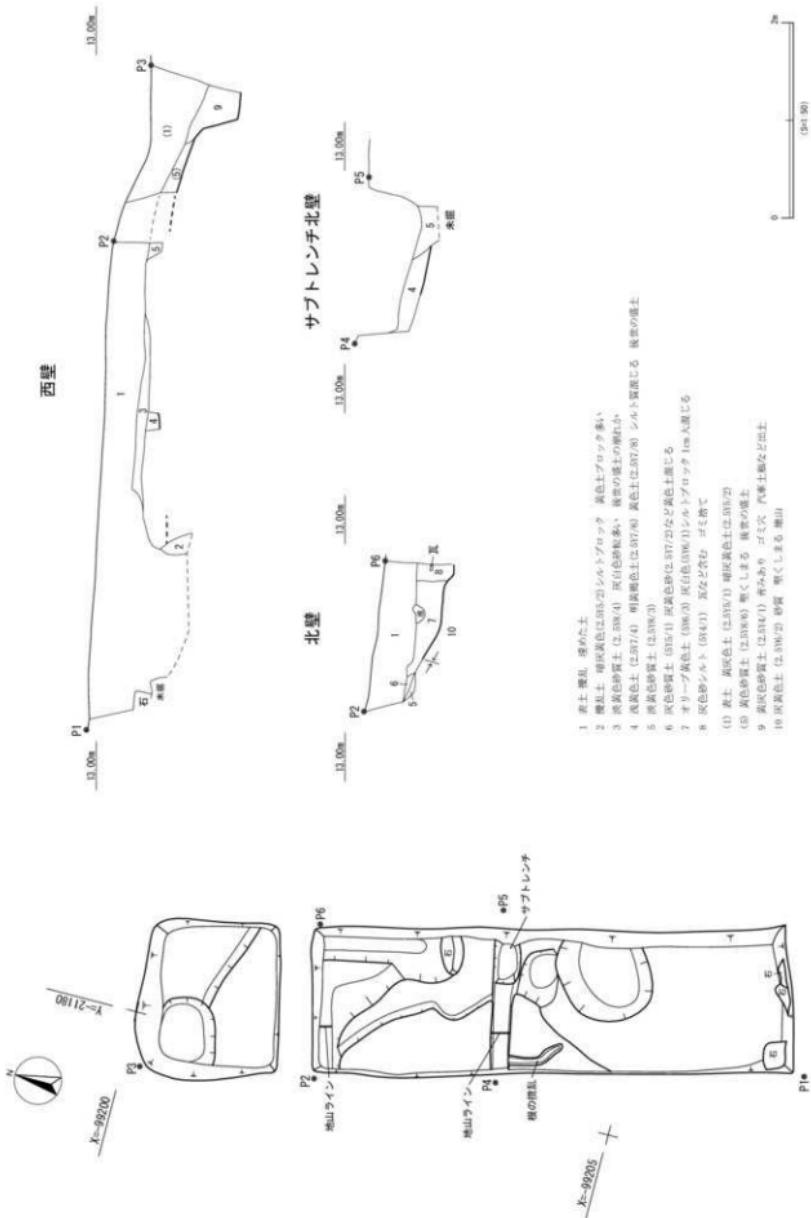
第21図 第4トレンチ平面図



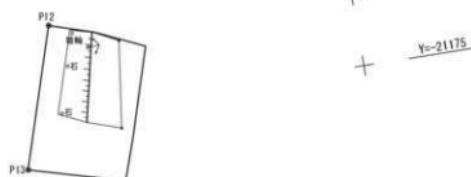
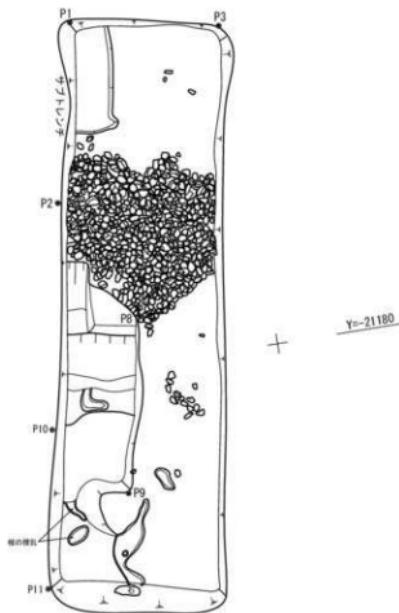
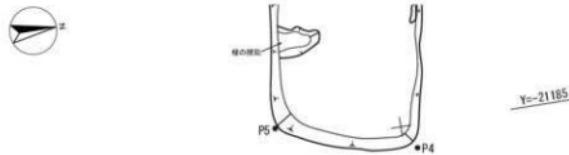
第22図 第4トレンチ土層断面図



第23図 第5トレンチ平面図・土層断面図

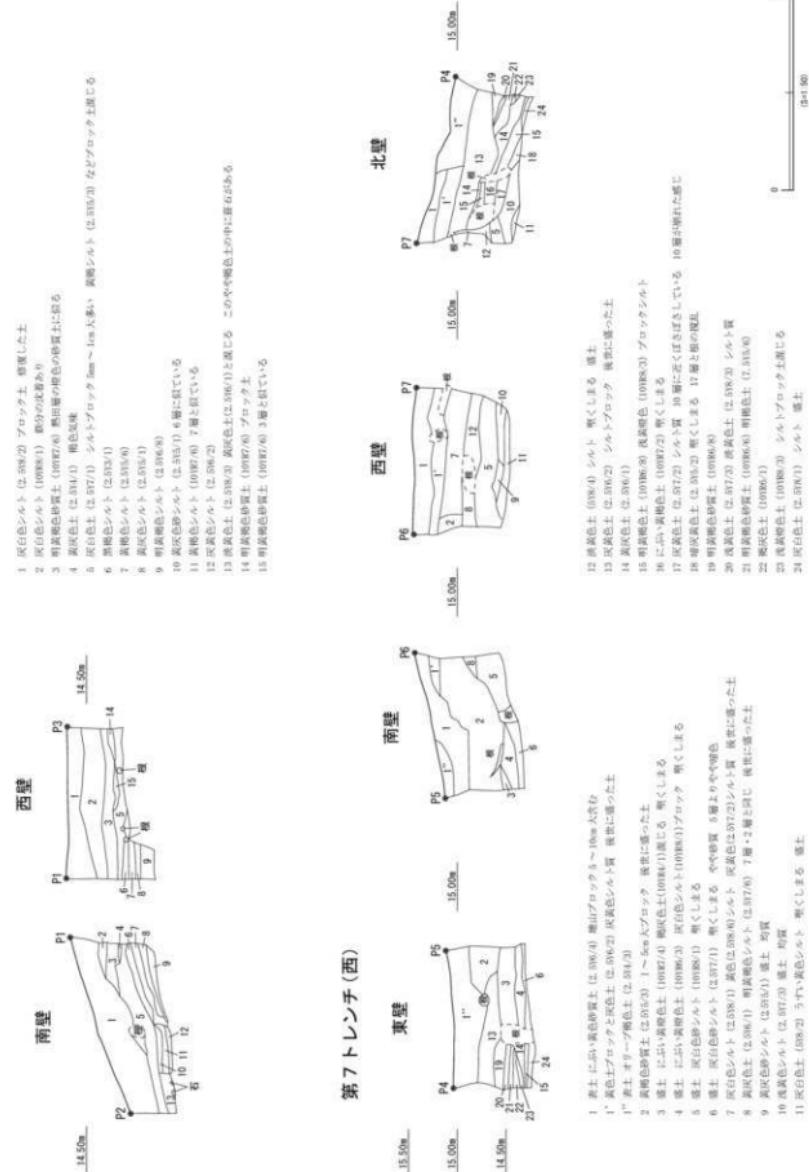


第24図 第6トレンチ平面図・土層断面図

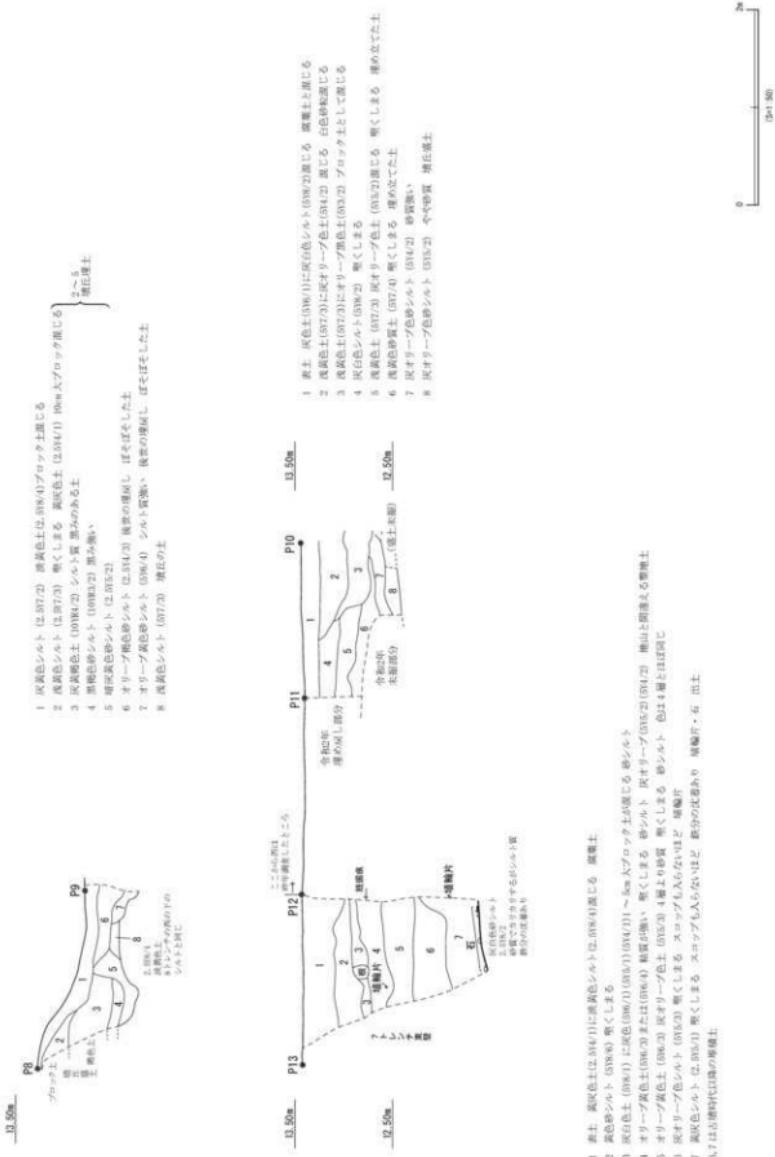


第25図 第7トレンチ平面図

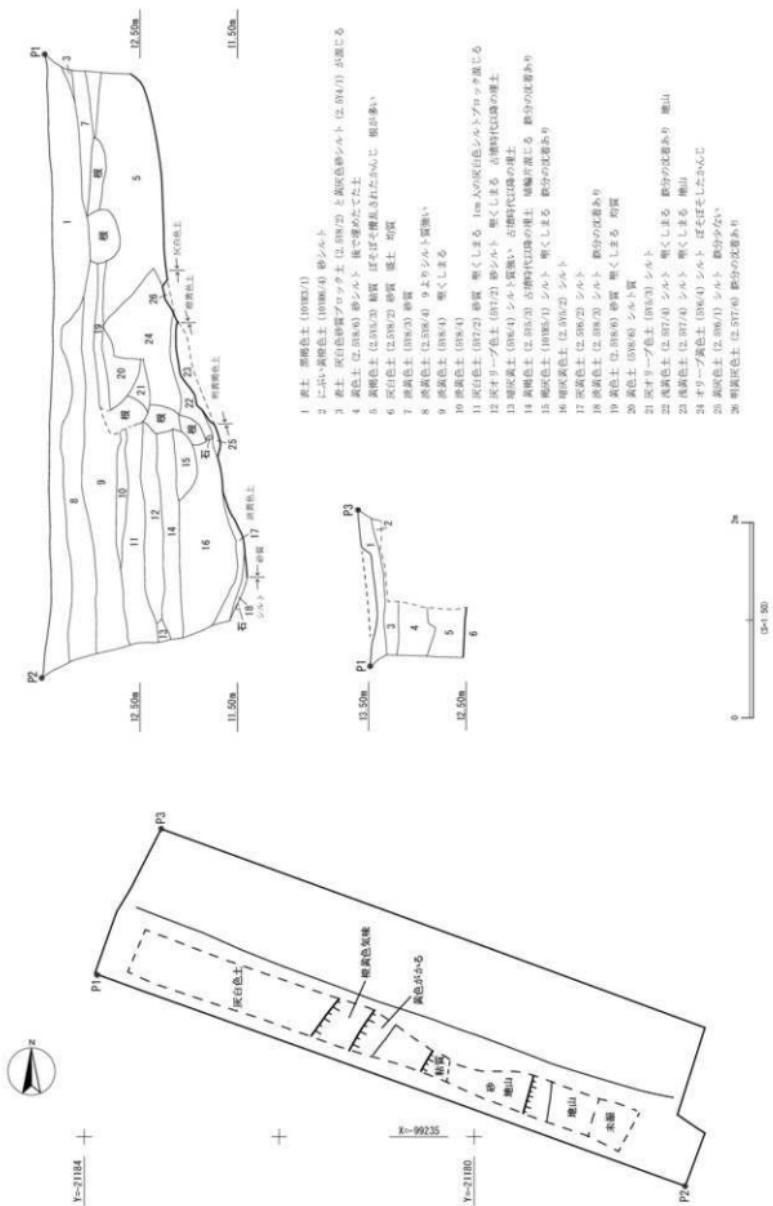
0 2m
(5-150)



第26図 第7トレンチ土層断面図 (1)



第27図 第7トレンチ土層断面図（2）



第28図 第8トレンチ平面図・土層断面図

墳丘の盛土と考えていたⅡ層・淡黄色土は、下位の堆積層を覆う整地土であることが判明した。この時期ははっきりしないが、16世紀代の常滑焼の甕口縁部が出土したことから、近世以降であろう。

表2 第8トレンチ南壁土層断面の層序

	土層名	層厚	第28図で対応する土層
I	表土層	厚さ0.2m	図中 1層
II	淡黄色土	厚さ0.5m	図中 8・9・10層
III	灰白色土・灰オリーブ色土	厚さ0.4m	図中 11・12層
IV	黄褐色土・暗灰黄色土・灰黄色土	厚さ0.9m	図中 14・16・17層
V	淡黄色土(砂質土、地山)		

Ⅲ層・灰白色土・灰オリーブ色土は、墳丘の土と考えられるオリーブ黄色土(第28図中24層)等が流出して再堆積したのではないかと考えられる。ただし、24層が比較的縮りがないに比べて堅く縮まっている違いがある。IV層・黄褐色土・暗灰黄色土は極めて堅く縮ったシルトで、埴輪片が出土した。地山面には転落石があった。地山は、東半3分の1は淡黄色砂質土であったが、西側は明黄褐色土、橙黄色土、灰白色土であった。当初は盛土が残存していると考えたが、上位に堆積した地山面と捉えた。そうすると、古墳を築造するにあたり、完全な平坦化をしないで、若干丘上に削り出した上に盛ったことになる。

第28図中24層は、あまり縮まっていないが、令和2年度第2トレンチの葺石下の土も同様な土であったことから、墳丘盛土と考えられる。24層の東側は根による擾乱があるが、その傾斜の延長線上に地山面が平坦面に変わる地点が位置する。したがって、墳丘裾は地山面が緩く傾斜し平坦面に至る傾斜変換点と想定される。

第4章 出土遺物

遺物は、遺物収納箱(内寸33cm×53cm×15cm)換算で、令和2年度調査で1箱、令和3年度調査で1箱出土している。これ以外に苔石、近現代陶磁器等(出土遺物に含めなかったもの)を採集した。

1 墳輪

円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪(蓋形埴輪)がある。円筒・朝顔形埴輪はいずれも小片で、全体の形を知る資料はない。

円筒埴輪(第29図1~26・第30図2~4)

器壁の厚さ、色調、焼成、器壁の調整技法から2種類に分けることができる。

1類 第29図1、2、4~13、15~17、19~21、25、26・第30図2は、厚さ1.0~1.2cmあり、外側が第29図14、22、23、24は橙色、それ以外は浅黄橙色、黄橙色を呈する。外面にヨコハケ調整を施す。ハケ目は、4本/1cm幅と太い。また黒斑の有無も現状では確認できる資料はない。第29図14は内面のハケ調整2.5本/1cm幅で明瞭に残る。第29図25は、底部1段目の破片で外面は板ナデ調整を施す。断面が褐色を呈しており、他の円筒埴輪と異なり、焼成については蓋形埴輪と似た状況である。年代は、5世紀前半頃と思われる。

2類 第29図22~24・第30図3、4は、厚さ0.9~1.0cmと器壁が薄く、橙褐色を呈し、焼成が堅緻で

ある。外面の回転ヨコハケ調整を施す。ハケ目は7、8本/1cm幅と細かい。年代は5世紀中葉以降と思われる。

朝顔形埴輪（第29図3、14、18・第30図1、5～7）

5は口縁部の小片で、口縁端部をナデ調整し沈線が1条めぐる。6は口縁部に近い部位で、外面に赤色顔料が塗られている。

蓋形埴輪（第30図8～16）

13は、立ち飾り部の飾り板の鰐部分で、切れ込みが施されている。厚さ0.9cm。14は立ち飾り部の飾り板受部の破片である。外面は浅黄橙色を呈し、断面は黒色を呈す。15は笠部の破片で、笠部と台部の接合部である。縦方向の刻線（沈線）と横方向の刻線（沈線）が残る。横方向の刻線（沈線）は直線気味でカーブが緩いが、内面の台部が円形を呈していることから、蓋形埴輪とした。16は笠部の破片で、笠部中央突帯から笠部先端の突帯までが残る。復元笠径は、53.4cmである。笠下半部の表現は、横方向の刻線（沈線）の間に縦方向の刻線（沈線）が3条1単位として刻まれている。横方向の刻線（沈線）は、上位が2条、下位が1条である。外面はハケ調整後ヘラナデ調整を施す。内面はハケ調整後ナデ調整を施す。ユビオサエ痕が残る。断面を観察すると、笠上半部から笠下半部（笠縁）を接合するにあたり、上位に粘土を重ねていく技法である（第39図 津堂城山タイプ）。色調は、外面黄橙色、内面にぶい橙色、断面黄橙色、灰色である。

蓋形埴輪の破片は、断面が黒色～灰色のものであることから、10、11、12は、外面の色調が橙色～にぶい橙色を呈し、器壁の厚さが0.8～0.9cmと薄い。薄いのが気になるが、断面がやや褐色～黄灰色を呈していることから、蓋形埴輪の台部とした。第29図26、第30図8の外面の色調は、にぶい橙色、にぶい黄橙色、断面が暗灰色を呈し、蓋形埴輪第30図14に似る。年代は5世紀初頭～5世紀前半と思われる。

2 土師器・須恵器・灰釉陶器

土師器（第31図1）

1は底部の破片で、底径8.6cmをはかる。調整は磨滅のため不明である。

須恵器（第31図2、3）

2は長頸壺の底部の破片である。高台は方形角形で外側にふんばっている。外面ヘラケズリ未調整、内面ヨコナデ調整を施す。内面に輪積み痕が残る。底面は回転糸切痕が残る。年代は9世紀以降と思われる。

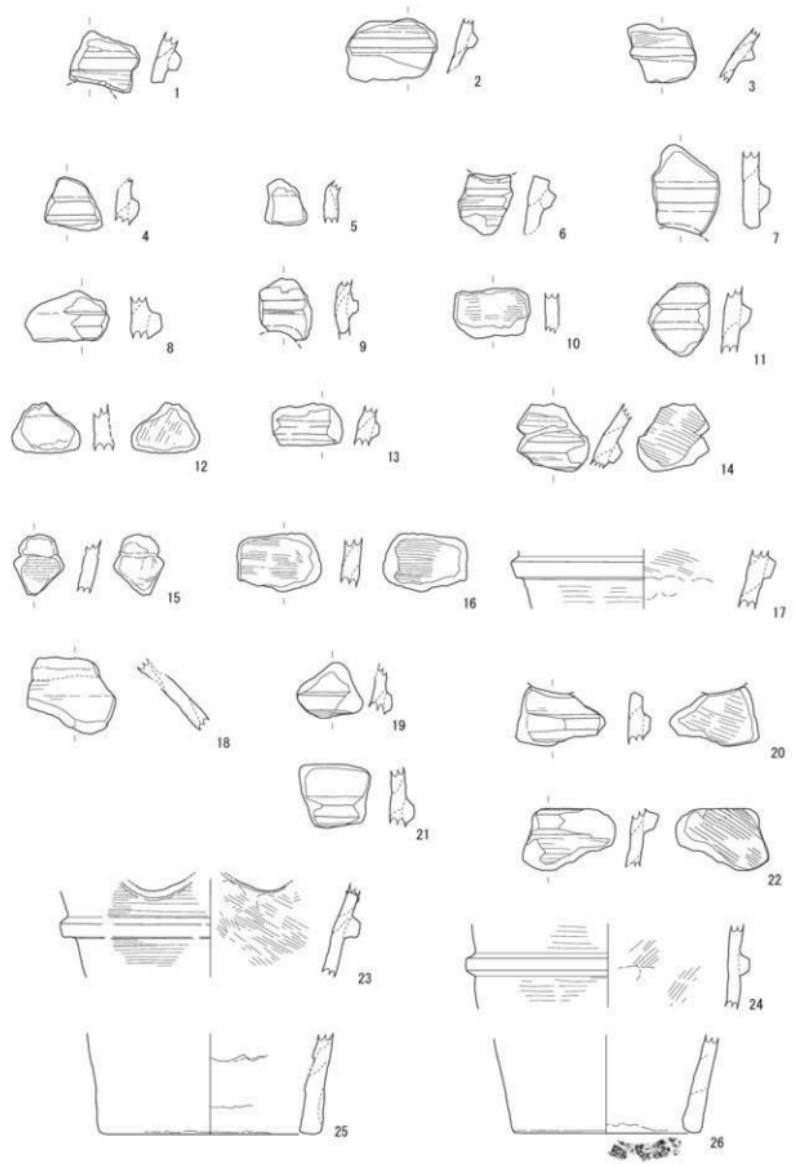
灰釉陶器（第31図4）

4は皿の口縁部の破片である。灰釉が口縁部に掛けられているが、発色は悪く痕跡程度である。

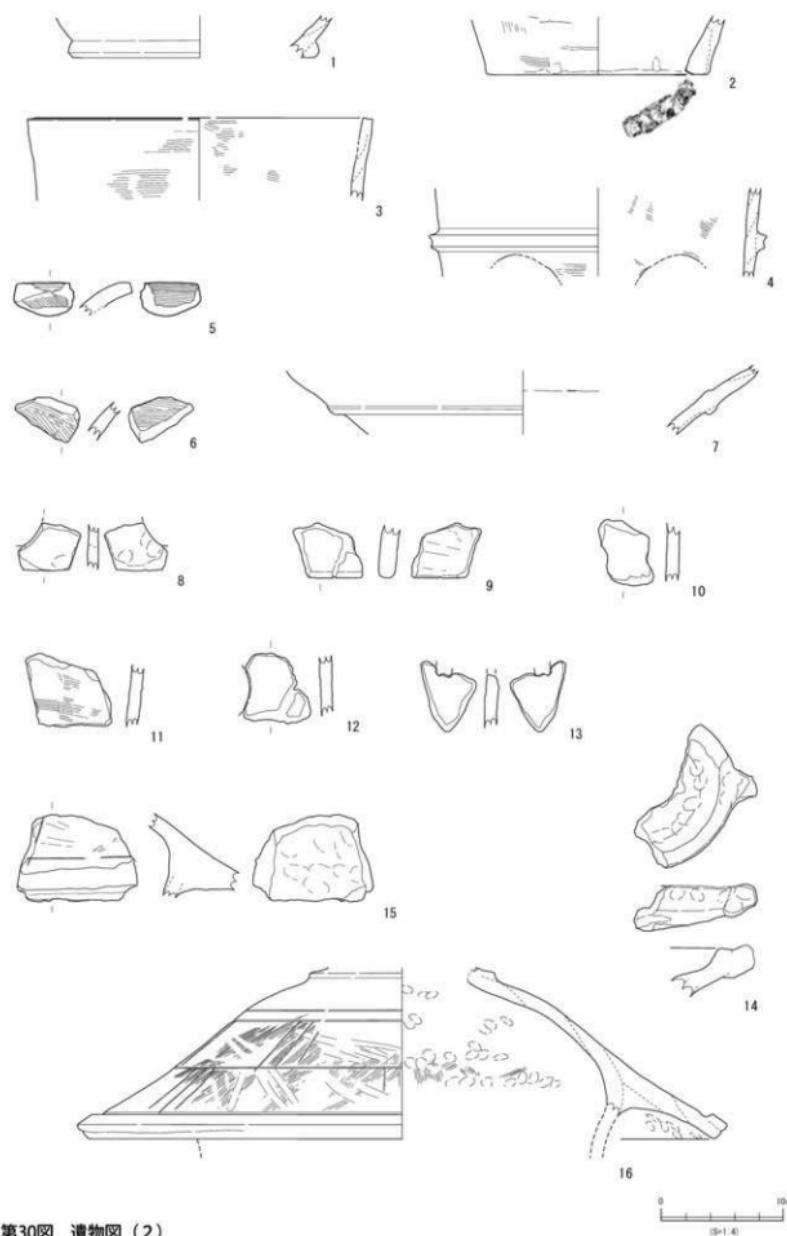
3 陶器・磁器・玩具

陶器（第31図5～7）

5は常滑焼の甕口縁部の小片である。16世紀代のものである。6は常滑焼の甕または壺の体部片である。7は甕の底部片である。



第29図 遺物図（1）



第30図 遺物図 (2)

汽車土瓶（第31図8）

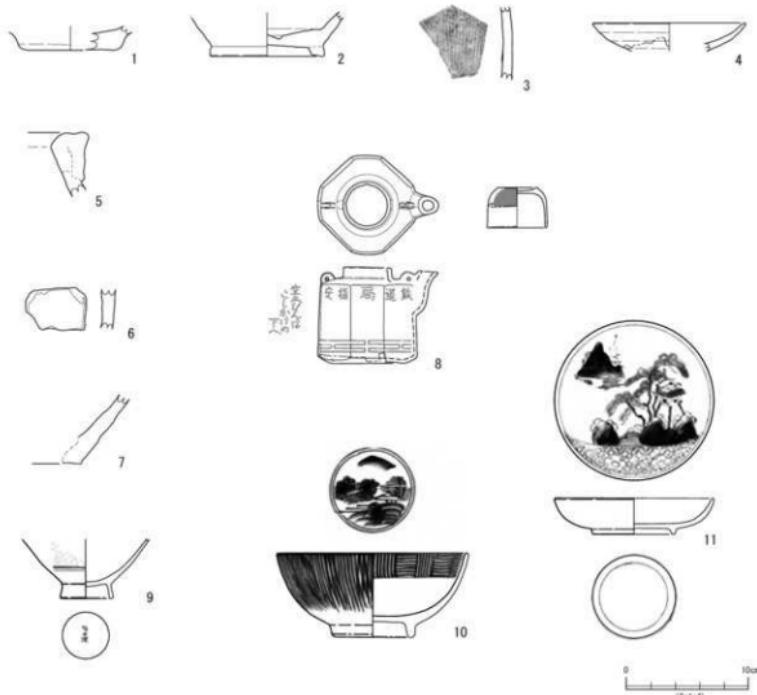
美濃焼の鉛込みの土瓶で、八角形を呈し、一边に注ぎ口がつく。上面の前後に耳と呼ぶ、紐を通す孔がつくられた吊り下茶瓶である。側面には、「鉄道局指定」「空土びんはこしきけの下へ」と書かれている。全体に明黄褐の釉薬が掛けられている。蓋兼用の湯呑が付属し、同じ釉薬が掛けられている。完形品である。汽車土瓶3期編年のうち、中期後半（昭和10年代～昭和20年）～後期前半（昭和21年～昭和30年頃）のものと思われる（文献72）。

磁器（第31図9、10、11）

9は茶碗で、高台内側に「有田焼」と書かれている。10は丶井で、口縁部内面に縦線と横線を交互に配置し、外面にはハケ状に縦線を呉須で描く。見込みの團線と樓閣山水はコバルトで描く。11は皿で、見込みに團線と上半に樓閣山水、下半に梅の花が描かれている。いずれも現代のものである。

玩具（写真図版14-4）

自動車のおもちゃで、車体底面に刻印「PORSCHE CARRERA6」「NO.737」「MADE IN HONG KONG」、ROXY TOYS の馬印がある。全長13.8cm、幅5.4cm。ポルシェカレラ6（ポルシェ906）は、1966年デビューしたレーシングカーである。1967年にはポルシェ910（カレラ10）がデビューしている。



第31図 遺物図（3）

表3 遺物観察表(1)

発見 場所	No.	図版番号	分類	部位	出土位置 No.と埋合時	正幅(cm)	残存状況	外装調査	内装調査	焼成	色調	印土	備考	
52 1	第2904	14-2	円筒埴輪	胴部	2トレンチ	—	小片	ナデ	崩滅のため不明	良好	黄褐色 10YR8/6	■		
40 2	第2904	14-5	円筒埴輪	胴部 No.4	3トレンチ	—	小片	崩滅のため不明	崩滅のため不明	良好	灰白 2.5YR8/2	■		
48 3	第2904	14-5	朝祖形埴輪 か	胴部	3トレンチ No.8	—	小片	崩滅のため不明	崩滅のため不明	良好	浅黃褐色 7.5YR8/3	■	野獣	
18 4	第2904	15-7	円筒埴輪	胴部	4トレンチ(東)	—	小片	ナデ	崩滅のため不明	良好	明黃褐色 10YR8/6	粗	白色跡 粉多く含む	
44 5	第2904	15-6	円筒埴輪	胴部	4トレンチ(東)	—	小片	崩滅のため不明	崩滅のため不明	良好	明黃褐色 10YR7/6	やや密	野獣か	
11 6	第2904	15-7	円筒埴輪	胴部	No.30	—	小片	崩滅のため不明	崩滅のため不明	良好	淡黄 2.5YR8/4	やや粗		
15 7	第2904	15-7	円筒埴輪	胴部	4トレンチ(東)	—	小片	崩滅のため不明	崩滅のため不明	良好	黄 2.5YR8/6	粗		
19 8	第2904	15-6	円筒埴輪	胴部	4トレンチ(東)	—	小片	ナデ	崩滅のため不明	良好	明黃褐色 10YR7/6	粗	野獣	
14 9	第2904	15-7	円筒埴輪	胴部	4トレンチ(東)	—	小片	ナデ	崩滅のため不明	良好	外表面：浅黃褐色 内面：白	粗	透かし孔	
16 10	第2904	15-7	円筒埴輪	胴部	4トレンチ(東)	—	小片	ヨコハケ	崩滅のため不明	良好	外表面：黄褐色 内面：白	粗		
7 11	第2904	15-8	円筒埴輪	胴部	No.11	—	小片	崩滅のため不明	崩滅のため不明	良好	浅黃褐色 10YR8/4	粗		
12 12	第2904	15-6	円筒埴輪	胴部	4トレンチ(東)	—	小片	ハケ	崩滅のため不明	良好	浅黃褐色 10YR8/4	■		
9 13	第2904	15-8	円筒埴輪	胴部	No.24	—	小片	崩滅のため不明	崩滅のため不明	やや良	浅黃褐色 10YR8/4 断面：黒 7.5YI2/1	粗		
17 14	第2904	15-7	朝祖形埴輪	胴部	4トレンチ(東)	—	小片	ナデ	ナナメハケ	良好	外表面：淡黄 内面：黄褐色 10YR8/4	粗		
46 15	第2904	15-8	円筒埴輪	口縁部	4トレンチ(東)	—	小片	ヨコハケ	ハケ	良好	浅黃褐色 10YR8/4	やや粗		
12 16	第2904	15-7	円筒埴輪	胴部	No.31	—	小片	ヨコハケ	ヨコハケ	良好	浅黃褐色 10YR8/4	粗		
26 17	第2904	15-1	円筒埴輪	胴部	4トレンチ	—	小片	ヨコハケ	ナナメハケ	良好	浅黃褐色 10YR8/4	粗		
8 18	第2904	15-8	朝祖形埴輪	胴部	No.18	—	小片	ハケ	ハケ	良好	淡黄 2.5YR8/4	粗		
22 19	第2904	15-1	円筒埴輪	胴部	No.7	—	小片	崩滅のため不明	崩滅のため不明	良好	黄褐色 10YR8/6	粗		
20 20	第2904	15-1	円筒埴輪	胴部	No.3	—	小片	崩滅のため不明	ハケ	良好	内外面：黄褐色 内面：淡黄褐色 10YR8/3	やや粗		
23 21	第2904	15-1	円筒埴輪	胴部	No.12	—	小片	崩滅のため不明	崩滅のため不明	良好	黄褐色 10YR8/6	粗		
21 22	第2904	14-7	円筒埴輪	胴部	No.5	—	小片	ヨコハケ	ヨコハケ	良好	浅黃褐色 10YR8/4	粗		
10 23	第2904	15-6	円筒埴輪	胴部	4トレンチ(東)	—	小片	ヨコハケ	ハケ	良好	外表面：淡黄 内面：淡黄褐色 10YR8/4	■	外面上部 内面に淡 黄褐色 ある箇所 成	
6 24	第2904	15-6	円筒埴輪	胴部	No.9	—	小片	ヨコハケ	ナナメハケ	良好	外表面：黄褐色 内面：淡黄褐色 10YR8/4	やや粗	22~24 同一個体	
5 25	第2904	15-6	円筒埴輪	底部	4トレンチ(東) No.2	底径 (17.2)	1/8	ナデ	指面を極	崩滅のため不明	やや良	黄褐色 10YR8/6	粗	
24 26	第2904	16-2	円筒埴輪	底部	4トレンチ(東) No.2	底径 (15.4)	1/8	ナデ	指面を極	崩滅のため不明	やや良	外表面：淡黄 内面：淡黄褐色 7.5YR8/6	やや粗	野獣
36 1	第3004	16-7	朝祖形埴輪	胴部	7トレンチ(東)	—	小片	崩滅のため不明	崩滅のため不明	やや良	黄褐色 10YR8/6	今粗	野獣	
34 2	第3004	14-6	円筒埴輪	底部	積合の痕跡で保 留	底径 (18.0)	1/8	タテハケ	崩滅のため不明	良好	内表面：白 内面：淡黄褐色 7.5YR8/6	粗	白色跡 粉多く含む	
26 3	第3004	15-2	円筒埴輪	口縁部	4トレンチ	口径 (27.2)	小片	ヨコハケ	ヨコハケ	良好	内表面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色 7.5YR8/6, 灰白 10YR7/1	白	白色跡 粉混じる	
28 3	第3004	15-2	円筒埴輪	口縁部	4トレンチ	—	小片	ヨコハケ	ヨコナデ	良好	内表面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色 7.5YR8/6, 灰白 10YR7/1	白	白色跡 粉混じる	
27 4	第3004	15-2	円筒埴輪	底部	4トレンチ	—	小片	ヨコハケ	ナナメハケ	良好	内表面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色 7.5YR8/6, 灰白 10YR7/1	白	白色跡 粉混じる	
40 5	第3004	15-8	朝祖形埴輪	口縁部	4トレンチ(東) No.14	—	小片	ナナメハケ	ハケ	良好	外表面：断面：淡黄褐色 内面：断面：淡黄褐色 10YR8/4, 内面に ふた付 7.5YR7/4	粗	野獣成 ある箇所 成	
31 6	第3004	16-3	朝祖形埴輪	口縁部	5トレンチ No.8	—	小片	ヨコハケ。ナナメ ハケ	ヨコハケ	良好	浅黃褐色 7.5YR8/6	やや粗	外表面：淡 黄褐色 7.5YR8/2, 内面：	
39 7	第3004	16-8	朝祖形埴輪	口縁部	8トレンチ	—	小片	崩滅のため不明	崩滅のため不明	やや不 良	灰白 10YR8/2	やや密	野獣	
45 8	第3004	16-2	埴輪	胴部	4トレンチ(北) No.1	—	小片	指面を極	指面を極	良好	外表面：にぶた付 内面：指面を極 10YR8/4, 内面に ふた付 7.5YR7/2	■	透かし孔	
47 9	第3004	14-8	着形埴輪	台部	4トレンチ No.15	—	小片	ナデ	崩滅のため不明	良好	内表面：黄褐色 内面：指面を極 10YR7/4	やや粗	野獣	
42 10	第3004	16-4	着形埴輪	台部	5トレンチ No.3	—	小片	崩滅のため不明	ナデ	良好	内表面：にぶた付 内面：指面を極 7.5YR7/4, 断面：黄 灰 2.5Y4/1	やや粗	野獣	

表4 遺物観察表（2）

発見 高さ (cm)	No.	発見場所	与貢地場 番号	種類	部位	出土位置 No.と組合せ	注釈(cm)	残存状況	外観調査	内部調査	焼成	色調	印土	備考
32	11	第30回	16-4	蓋形埴輪	台部	5トレンチ No.9	—	小片	ヨコハケ	指讀圧痕	やや食	内外面：褐 7.5VR7/6 断面：褐 7.5VR7/6	やや粗	
30	12	第30回	16-4	蓋形埴輪	台部	5トレンチ No.1	—	小片	ナデ	ナデ	やや食	内外面：褐 7.5VR7/6 断面：褐 7.5VR4/1	やや粗	野焼
41	13	第30回	16-1	蓋形埴輪	立ち跡 下部	4トレンチ(東) No.1	—	小片	痕識のため不明	—	良好	明黄褐 10YR8/6	やや粗 1mm大砂粒 含む	植部、野 燒
4	14	第30回	16-1	蓋形埴輪	立ち跡 下部	4トレンチ(東) No.1	—	小片	ナデ	ナデ	良好	浅黄褐 10YR8/4 断面：里 2.5GY2/1	砂 砂粒含む	野焼
25	15	第30回	15-3	蓋形埴輪	笠部	4トレンチ	—	小片	ナデ	ナデ	良好	黄褐 10YR8/6 明黄 褐 10YR7/6	やや粗	細削
33	16	第30回	13	蓋形埴輪	笠部	5トレンチ	最大径 (53.4)	1/4	ハケのちナデ	ハケのちナデ	良好	外面上に赤・黄褐 10YR7/7 内面に赤 1.5-2.5VR7/4 断 面：裏面10YR8/6 灰N4/	粗	細削
43	1	第31回	15-4	土器器	底部	4トレンチ No.4	底径 (8.6)	1/4	ナデ	不明	良好	に赤・黄褐 10YR7/4	やや滑	
13	2	第31回	15-5	須恵器・長 縄陶	底部	4トレンチ(東) No.32	底径 (9.4)	小片	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	外面上・底 2.5VR6/1 内面・斷 面：底面 2.5Y7/1	やや滑	旋付接着
38	3	第31回	16-8	須恵器	体部	8トレンチ・シ ル・底土	—	小片	タタキ痕	ナデ	良好	外面上：灰 2.5VR6/1 内面・斷 面：底面 2.5Y7/1	やや滑	
29	4	第31回	14-6	灰釉陶器・皿	口縁部	4トレンチの内 で探集	口径 (12.4)	小片	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	灰白 2.5Y8/1	やや滑	施釉が認 められる
37	5	第31回	16-8	陶器・甕	口縁部	8トレンチ	—	小片	ヨコナデ	ナデ	良好	外面上：暗赤褐 2.5VR3/3 断面： 赤褐 2.5YR5/6	粗	常滑燒
50	6	第31回	14-2	陶器・甕	体部	2トレンチ	—	小片	ヨコナデ	ナデ	良好	外面上：灰 7.5VR5/2 内面：褐 灰 7.5VR6/1	滑	常滑燒
51	7	第31回	14-2	陶器・甕	底部	2トレンチ	—	小片	ナデ	ナデ	良好	浅黄 7.5VR8/6	滑	
35	8	第31回	16-5 16-6	汽車土壇	6トレンチ	口径 3.25 高さ3.9 7.95	完形	型作り	—	良好	淡黄 5Y8/3 色： 明黄褐 2.5Y6/6	滑	「鉄道局 指標空 港上人山 こかけ の下に」	
35	8	第31回	16-5 16-6	汽車土壇・ 廻香	6トレンチ	口径 3.25 高さ3.3	完形	ヘラケズリ	ヘラケズリ	良好	淡黄 5Y8/3 色： 明黄褐 2.5Y6/6	滑		
3	9	第31回	14-3	磁器・碗	高台	3トレンチ 濃 高付性 4.2	小片	—	—	良好	灰白 NB/	滑	「有田燒」	
1	10	第31回	14-3	磁器・井	3トレンチ 濃 15.6	一部欠 損	—	—	良好	灰白 NB/	滑			
2	11	第31回	14-3	磁器・皿	3トレンチ 濃 13.0	完形	—	—	良好	灰白 NB/	滑			
—	—	—	14-1	つり革	1トレンチ 表 土上位崩	完形	—	—	—	—	—	—		
—	—	—	14-1	ガラス瓶	1トレンチ 表 土上位崩	完形	—	—	—	—	—	—		
—	—	—	14-1	陶器	1トレンチ 表 土上位崩	小片	質入あり	—	良好	断面：灰白 7.5Y8/1	滑			
—	—	—	14-1	タイル	1トレンチ 表 土上位崩	小片	—	—	良好	断面：灰白 7.5Y8/1	滑			
—	—	—	14-1	陶器・甕	1トレンチ 表 土上位崩	小片	ナデ	付着物あり	良好	滑 2.5YR7/6	滑	肥腹		
—	—	—	14-4	玩具・車	3トレンチ 濃	ほぼ完形	—	—	—	—	—	—	PORSCHE CARTRAG	



第32図 葦石 (右下の石は12.5×8.5×8.0cm)



第33図 葦石 (右下の石は12.0×9.0×8.0cm)

第5章 総括

1 調査の成果

墳丘の規模

4地点で検出された葺石は、転落石と考えられるが、墳丘側は円弧を描くように出土した。この円弧を手掛かりに墳丘の中心点を求めた。その中心点から第8トレンチで想定した墳丘裾の位置、4トレンチ(北)で想定した墳丘裾の位置は、同じ距離であった。従って、墳丘規模は半径約21m、直径約42mと推定される。

墳頂部の現況は、本殿が建立されており本来の高さは不明であるが、地表面で標高17.0m～17.28mである。墳丘裾は、11.42m(第8トレンチ)、11.62m(第7トレンチ(東))、12.14m(第4トレンチ(北))である。北側にいくほど標高は高い。比高差は、4.86m～5.86mである。

周溝は確認されなかった。第3トレンチでは、墳丘の北側に鉤形に巡る溝(濠)の北側においても地山面で埴輪片が出土した。地山面は平坦であることから、周溝を伴わない古墳と考えられる。

墳丘盛土

墳丘を断ち割っていないため、正確な構築法は不明であるが、断片的な土層から推測する。

① 蔽石の検出された位置の墳丘裾側

第8トレンチでは、オリーブ黄色土で比較的軟らかい土、第2トレンチでは、暗灰褐色シルト、灰黄褐色土(10cm大黄色シルトブロック含む)の比較的軟らかい土のほか、灰白色土(砂質土、堅く締まる)が観察された。堅く締まった灰白色土のほかに軟らかい土も積んでいる。

② 蔽石の検出された位置の墳丘側

第7トレンチ、第7トレンチ(西)では、6.0～10.0cmの厚さで異なる土を積み上げていた。この異なる色の盛土は、葺石が転落、堆積している面より傾斜が強かった。第4トレンチ、第5トレンチでは、葺石が転落しその後崩落もしくは削平された状況である。現地表面に白灰色シルトが露呈しているか所が認められる。

第7トレンチ(西)では、比較的軟らかい土の下は灰白色シルトで堅く締まった土が堆積しており、基本的に灰白色系のシルトもしくは砂質土を積み上げ、その上に互層に土を積み上げていると想定される。

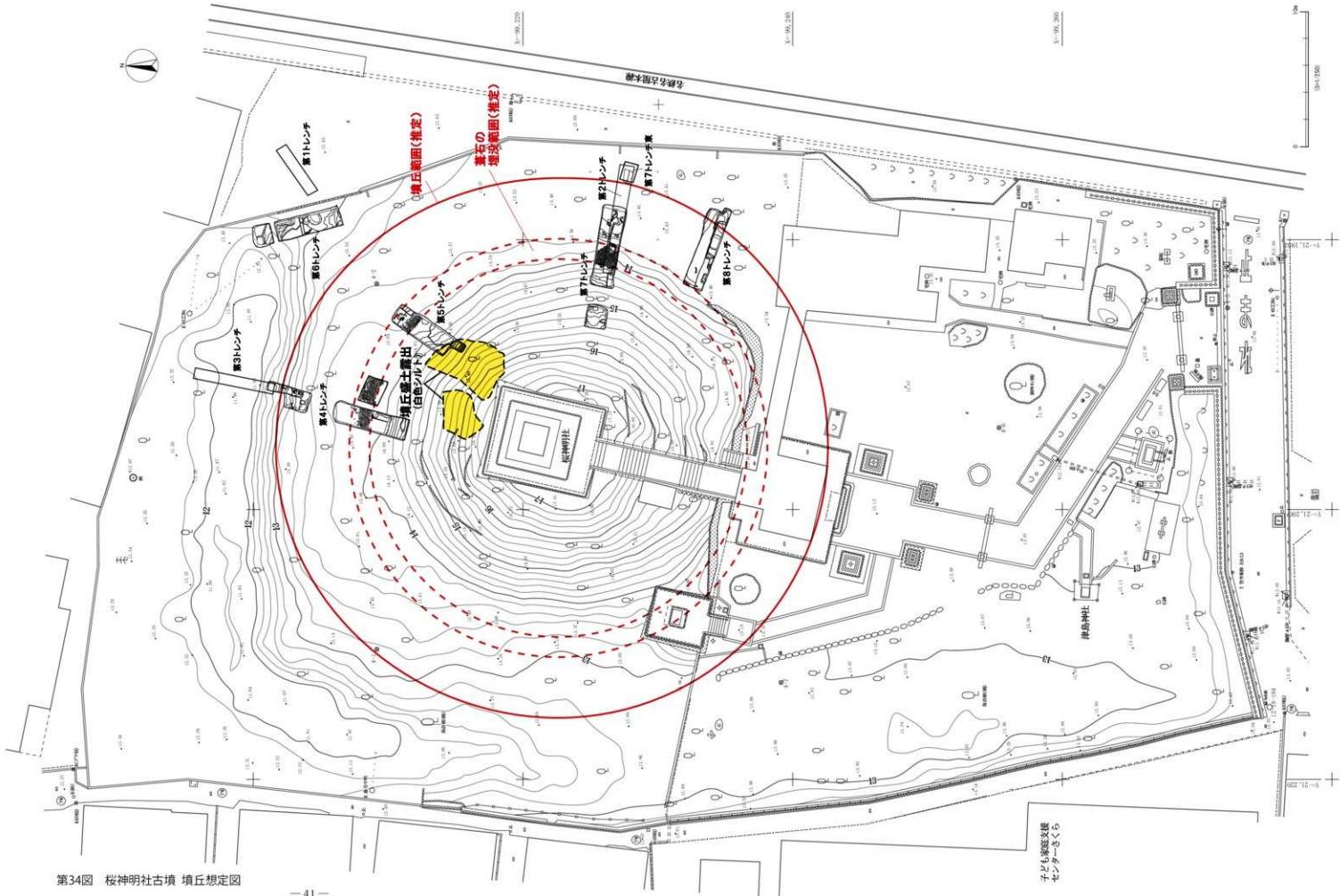
出土遺物

第5トレンチで出土した埴輪は、形象埴輪の蓋形埴輪の一部である。葺石の含まれる土層より下位から出土している。この埴輪は、断面中央が灰色、表面がにぶい黄橙色を呈していた。この焼成の埴輪片は、第4トレンチ、第7トレンチ(東)でも出土し、いずれも蓋形埴輪である。少なくとも墳丘の四隅付近には円筒埴輪、朝顔形埴輪に混じって蓋形埴輪を樹立していたものと思われる。

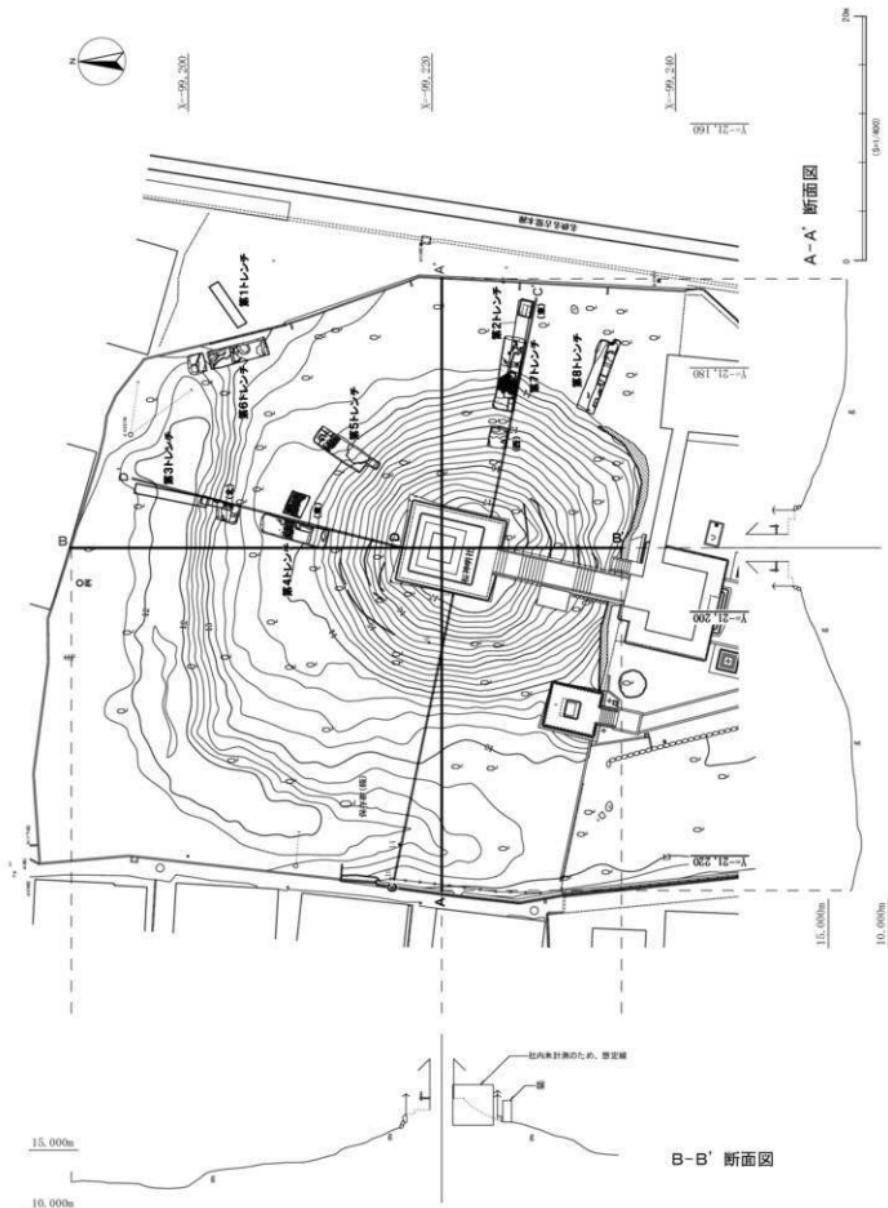
円筒埴輪片はいずれも小片で、原位置を保ったものはなく、据え付け個所は確認できなかった。磨滅が激しい破片が多い中、器壁にヨコハケ、ナナメハケが残るものがある。朝顔形埴輪も確認され、1点は赤彩が残る。

第4トレンチの葺石の間から土器底部片が出土している。葺石の含まれる黒褐色土からは、須恵器長頸壺類の底部片が出土している。

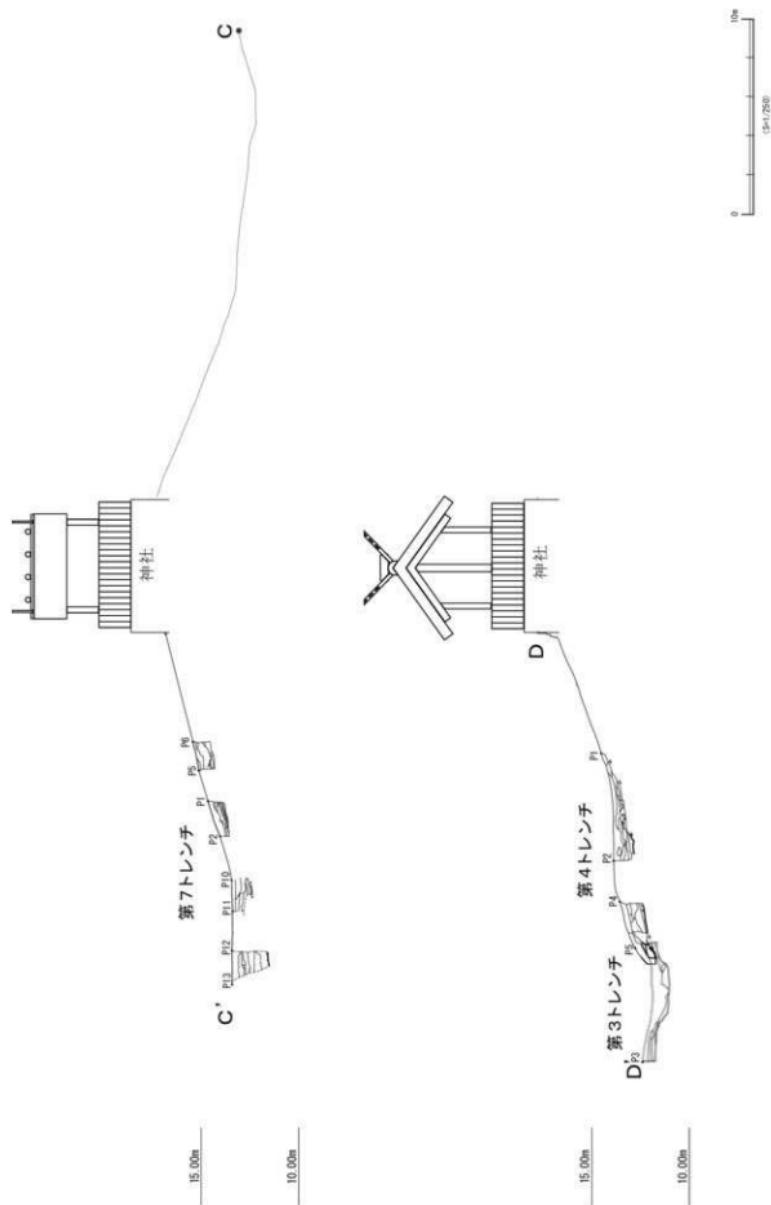
第6トレンチ(北)からは、北側に鉤形に巡る溝(濠)の擾乱土中から汽車土瓶が出土している。昭和



第34図 桜神明社古墳 墳丘想定図



第35図 桜神明社古墳エレベーション図（1）



第36図 桜神明社古墳エレベーション図（2）

20年代～30年代のものと思われる。第3トレンチの溝（濠）からは玩具の車が出土している（写真図版14-4）。昭和41年式であることから、これ以降の埋没である。

古墳の年代

古墳の年代は、出土した埴輪が手がかりとなる。蓋形埴輪は、田中秀和氏や松木武彦氏の研究（文献49・68）によれば、笠部の先端部に突堤の表現があり、笠骨表現が上下段で互い違いとなり、放射状沈線が3条となるI-B類（田中分類）、津堂城山タイプ新相（5世紀初頭～前半）に位置付けられる。形態は京都府大山崎町鳥居前古墳に近いが、笠縁の粘土の接合技法は津堂城山タイプ（第39図）と思われる。笠径50cm以上あり、近畿地方の奈良県奈良市神明野古墳、平城宮第一次大極殿下層SX7800、大阪府はさみ山遺跡例に劣らない。

小栗明彦氏は（文献23）、まず、笠部中位にあって笠部を上下に分割する界線の表現方法（XYZ）と端部処理方法（NLP）で分類する。次に布張り表現の分類として、区画配置をA～Dに分類する。襞の表現は0～3に4分類する。桜神明社古墳は、2条の平行する沈線で分割し（Y）、先端に1条の突堤を巡らす（P）。笠下半部に上下2段の布張り表現をもち、互い違いに配置する（Ac）。襞は3条沈線（3）に該当する。したがって桜神明社古墳は、Ac3YPとなる（第40図 Ac2YLの右下）。立ち飾り部が不明であるが、3～5段階・5世紀前半の時期に位置付けられる。

また、焼成では、内部が灰色であることが特徴である。黒斑部分は確認できないが、野焼きによる焼成と思われる。

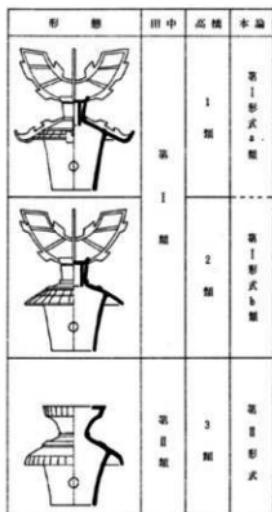
円筒埴輪は、野焼きと思われる器壁が厚く、ヨコハケ調整が幅広のハケ目を施すものが大半である。そのほかあな窯焼成と思われるものがある。

以上のような特徴から、蓋形埴輪は5世紀初頭～前半、円筒埴輪の野焼きの埴輪は5世紀前半、あな窯焼成の埴輪は5世紀中葉以降と2時期に分かれるようである。円筒埴輪の多くは小片で、ハケ調整が断続的なB種ヨコハケ調整か否かははっきりしないが、底部片のなかには、タテ方向の板ナデを施したものと考えられるものがあり、1段目にタテハケ調整を施すB種ヨコハケを有する埴輪に準ずる技法とも考えられる。したがって小片である円筒埴輪については、今後の検討課題としておきたい。

このように時期差を有する埴輪があることが判明したが、古墳の築造時期については、大きな破片のある蓋形埴輪、野焼き焼成の円筒埴輪の年代観から5世紀前半と推定しておきたい。またかつて出土した須恵器が5世紀末とされること、今回出土した埴輪にもあな窯焼成の埴輪が出土していることから、5世紀後半以降にも墳丘において祭祀が行われたのかもしれない。また葺石が転落して堆積した時期は、須恵器長頸壺の出土から9世紀以降と推定される。また視認できる鉤形に巡る溝（濠）は、埋土に埴輪片が含まれていなかった。後世に掘られた溜池状のもので、再掘削され昭和戦後期に陶磁器等が廃棄されたものと思われる。

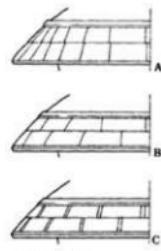
築造後の古墳

古墳は、築造後蓋形埴輪が破損して埋没し、古代には墳丘の表層（葺石等）が崩落した。葺石の出土状況が円弧を描き一樣であることから、地震により同時に崩落したのではないかと推定される。例えば仁和3年（887）の南海地震・東海地震は、M8.0～8.5と推定され、30余国で大震、信濃八ヶ岳が山体崩壊した。稻沢市の地蔵越遺跡では噴砂が確認されている（文献34・65）。葺石の量が少ないと、地表面に葺石が見当たらないことからその後も削平を受け、葺石と共に持ち去られた可能性が高い。単なる土取りで



第37図 蓋形埴輪の型式分類（松木1990）

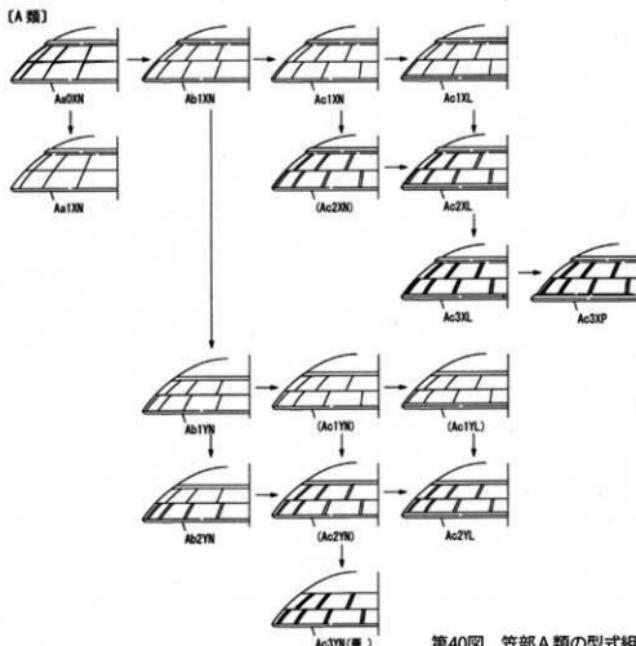
	笠下部の表現	物文記述			全形	笠上部
		A	B	C		
<small>参考範例</small>						
佐日葉 鶴 鎌						
津堂城山						?
古相						?
大谷今池1号						?
志解山						?
野中宮山						?
平塚1号						?
新神明野						?
平成宮下層						?
SX7800						?
相						?
佐応神						?
青田丸山						?

笠下部の表現
Cは無軸状(底面3条のもの)を含む。

第38図 諸要素の比較（松木1990）



第39図 笠縁の接合技法（松木1990）



第40図 笠部A類の型式組列（小栗2007）

は、名古屋市守山区の志段味大塚古墳のように墳丘を崖状に削り取る方法が考えられるが、古墳の円丘を保持しつつ表面の土を剥ぐように削る行為は、表層の土（互層に盛った比較的軟らかい土）が必要であったことのほか、古塚（墳墓）であることを認識し、何らかの規制が働いていたのではないかと推定される。

墳丘を削平した原因として考えられるのは、慶長6年（1601）に徳川家康の命によって行われた、東海道宿駅伝馬制を布くための街道整備である。東海道のわずか70m東に位置する桜神明社古墳は、畑や草地の中に浮かぶ小山であったであろうから、街道の築造あるいは修復に際し、墳丘の表層の土をはじめ、握り拳大の手頃な大きさであった葺石や埴輪を採取し利用したと考えられるのである。互層に盛った土が確認された第2トレーナー（第7トレーナー）は、墳丘の東側に位置していることから、東海道側の西側から土取りが行われ、街道の整備が完了したために東側の互層に盛った土が残ったと推測されるのである。

桜神明社の創建は不明であるが、元和3年（1617）に本殿修復の棟梁の奉納書があることから近世初期と地元では考えられている。今回の調査成果から推定すると、古塚（墳墓）を削ったことを契機として、祠を建てて祀ったのが、桜神明社創建につながったのではないだろうか。祭神に伊邪那岐大神（『愛知県神社名鑑』では伊邪那美命）、事解之男命、速玉之男命といった日本書紀の黄泉の国神話に登場する神々が祀られているのが示唆的である。

東海道整備を考慮すると、整備後の近世初期（慶長6年（1601）～元和2年（1616））には本殿を墳丘頂部に建築していたと考えられる。その後、淡黄色土一おそらくは汚濁されていない熱田層のきれいな土一を用いて墳丘南面の修築（土盛り）や墳丘裾周りを埋め立てて整地して、こんにちの姿になったものと思われる。

2 桜神明社古墳築造の意義

愛知県内出土の蓋形埴輪

愛知県内から出土している蓋形埴輪は、昭和58年（1983）に日野幸治氏が9例（古墳）、仙田作吉氏が「愛知県における古墳出土の形象埴輪」のなかで10例（古墳）を報告されている（文献17・19・25）。昭和64年（1989）には市橋芳則氏が全国からの出土例を集めて、分布の傾向について報告された（文献14）。加賀貴巳子氏は、平成6年（1994）に「愛知県内出土の形象埴輪地名表」を作成し、21例を報告された（文献26）。

これらに近年の調査例を加えると、現在知られているのは、古墳27基、遺跡1か所、古窯1基である。古墳は、円墳14基、帆立貝式古墳6基、方墳1基、前方後円墳6基である（表7）。

桜神明社古墳の編年的位置

桜神明社古墳の蓋形埴輪は、5世紀前半に位置付けられることから、愛知県内の蓋形埴輪のなかでも早い時期に製作され、樹立されたものと思われる（表5）。早い時期に蓋形埴輪が樹立された古墳は、名古屋市瑞穂区所在の八高古墳、西尾市所在の正法寺古墳が知られている。八高古墳は墳丘長推定約70mの前方後円墳で、円筒埴輪は、「土師質で黒斑のある野焼焼成」で「外側調整一次タテハケ、透孔は方形と円形があり」、4世紀後半～5世紀前半と推定されている（文献39）。正法寺古墳は、墳丘長90～94mの前方後円墳で、円筒埴輪は、2群に大別され、I群は細かいタテハケ調整を行うもの、II群は個体間の変異幅が大きく多種の形態が認められている。このような特徴から異なる工人集団による製作が指摘され

表5 蓋形埴輪出土古墳の編年（表中の数字は第41・42図と同じ）

		尾張	三河
300年	前半		
	後半	八高古墳(1)	
400年	前半	高塚古墳(2・3)、八幡山古墳、桜神明社古墳(4)	正法寺古墳(15~23) 寄名山1号墳(33~36)
	後半	稲沢大塚古墳(5~7)、能田旭古墳(8・9)、長坂6号墳(10)、志段味大塚古墳	経ヶ峰1号墳、小針5号墳(24~27)
500年	御旅所古墳、池下古墳(11)、松ヶ洞18号墳	古村積神社古墳(37~43)	
	前半	勝手塚古墳(12)、味美二子山古墳(13・14)	外山3号墳

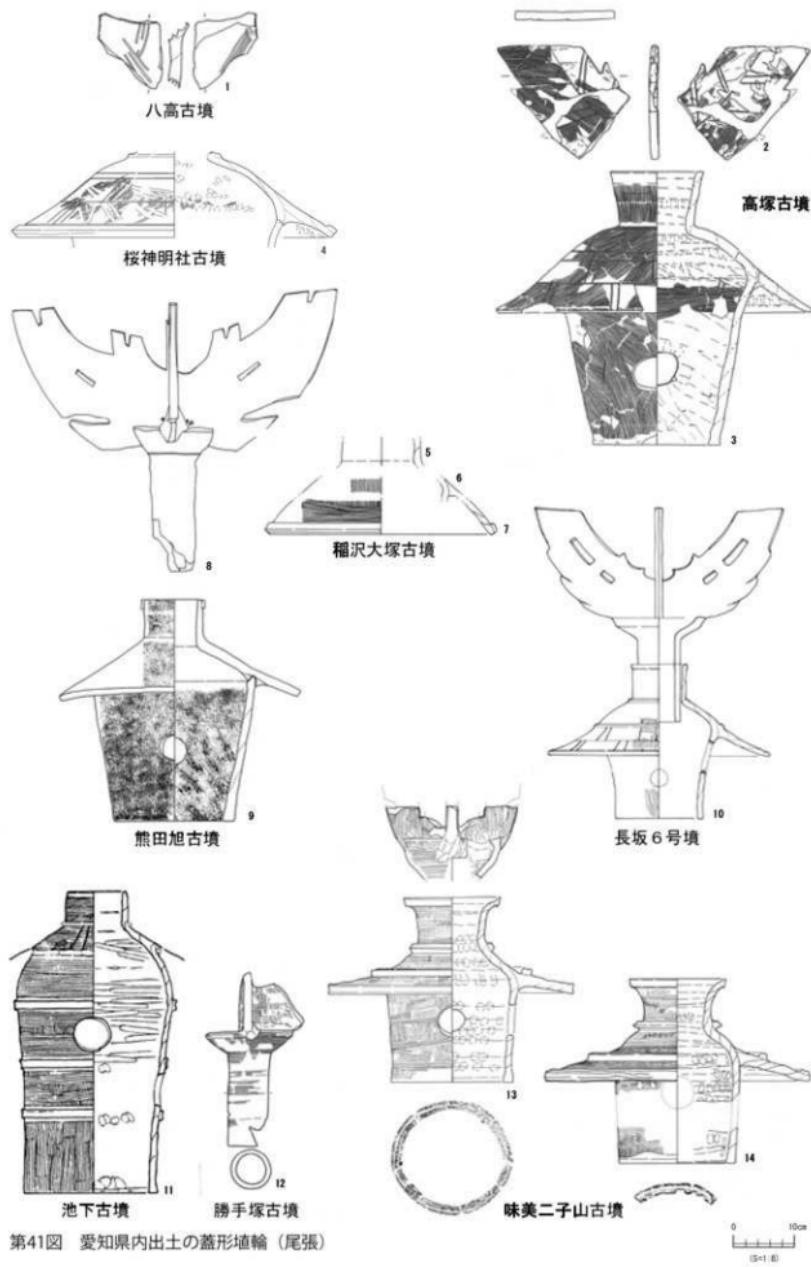
ている。蓋形埴輪は、松木武彦氏による研究成果から津堂城山タイプの新相として中期前葉（4世紀後葉～5世紀初頭）から中葉とする（文献1・5）。したがって、桜神明社古墳は、八高古墳、正法寺古墳の後出と位置付けられる。

桜神明社古墳築造の意義

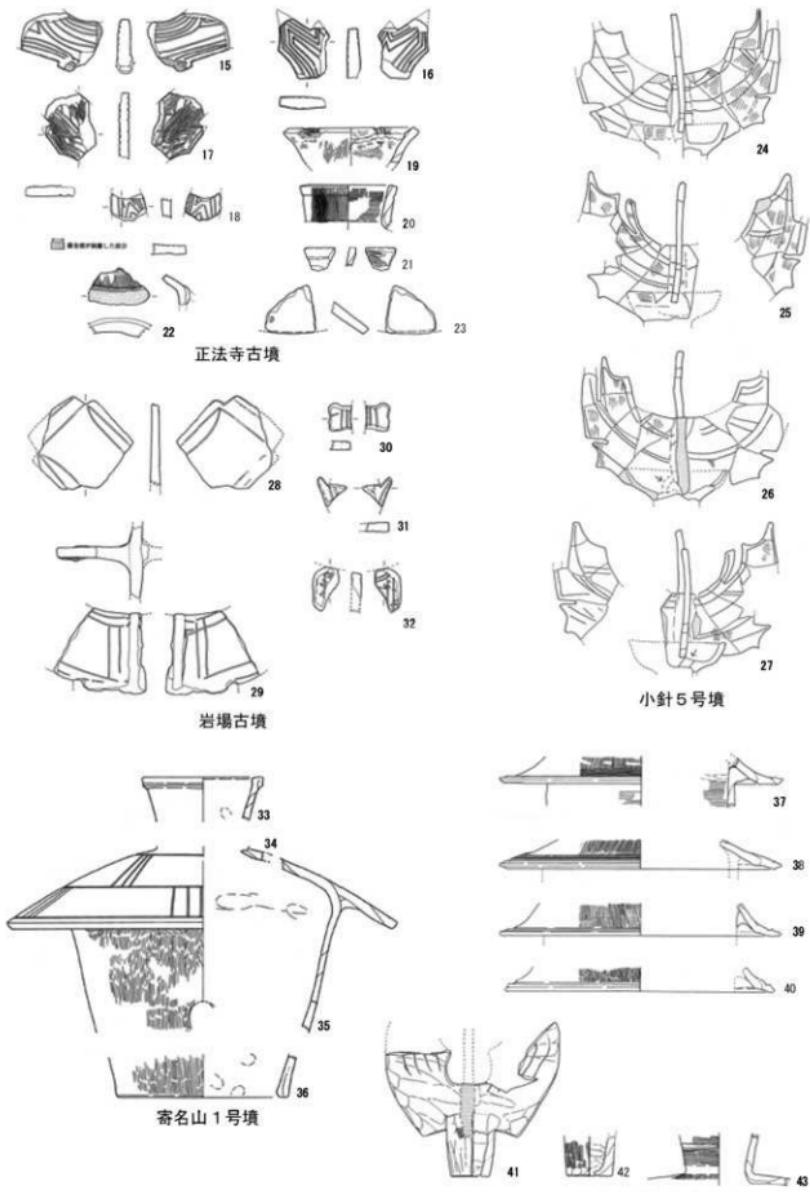
八高古墳は、瑞穂台地において、高田古墳（五中山古墳）と共に首長墳の一つとして築造され、「近畿地方の埴輪の特徴を反映し」、畿内政権との結びつきが指摘されている（文献39）。4世紀後半～5世紀前半に瑞穂台地では首長墓が相次いで築造されているのに対し、瑞穂台地の南方に位置する笠寺台地では、前方後円墳の築造は確認されておらず、「4世紀後半～5世紀初頭の墳長63mの造り出し付円墳で最大規模を誇る」（文献39）。鳥栖八剣社古墳と、これに次ぐ規模を有する桜神明社古墳が築造された。後世の鎌倉街道が付近を通過している、鳥栖八剣社古墳は、天白川左岸の鳴海丘陵と右岸の笠寺台地をつなぐ渡河地点付近に立地し（文献39）、陸上交通路や天白川流域の水上交通を掌握していたと考えられる。

それに対し、桜神明社古墳は、台地西縁近く、年魚市潟（伊勢湾最奥部）を望む最高所にあり、被葬者は入り江の港津や台地縁を通る陸上交通路を掌握する立場にあったと考えられる。港津の可能性の高い遺跡が西方100mに位置する曾池遺跡である。曾池遺跡は、年魚市潟に面する台地西縁に立地し、古墳時代前期後半～中期初頭（松河戸II式）の住居跡が確認されている。遺跡内にある開析谷を小規模な港津として利用していたほか、滑石製模造品が出土していることから古墳時代祭祀場も伴っていたと推測される（第43図 文献62・66・70・77・78）。

先行して築造された八高古墳より海岸部に近い位置に進出した桜神明社古墳は、津堂城山古墳新相の蓋形埴輪を採用している。河内平野の津堂城山古墳（大阪府藤井寺市所在）の築造を契機とした変革に呼応した動きと考えられる（文献48）。蓋形埴輪の製作技法に津堂城山タイプが認められることから、松木氏の述べるように、倭王権の工人の派遣、指導があった可能性が高い。笠径も50cmを越え近畿地方出土I-B類埴輪と遜色ない（文献49）。桜神明社古墳の被葬者は、近畿地方の倭王権の意向を背景に伊勢湾海上交通路の安定に寄与した勢力の一人であったのである。これは、正法寺古墳や宝塚1号墳の築造意図（主要港津の整備）と軌を一にした動きと捉えられる（文献1）。伊勢湾沿岸では、ほかにも港津の整備に係わり、

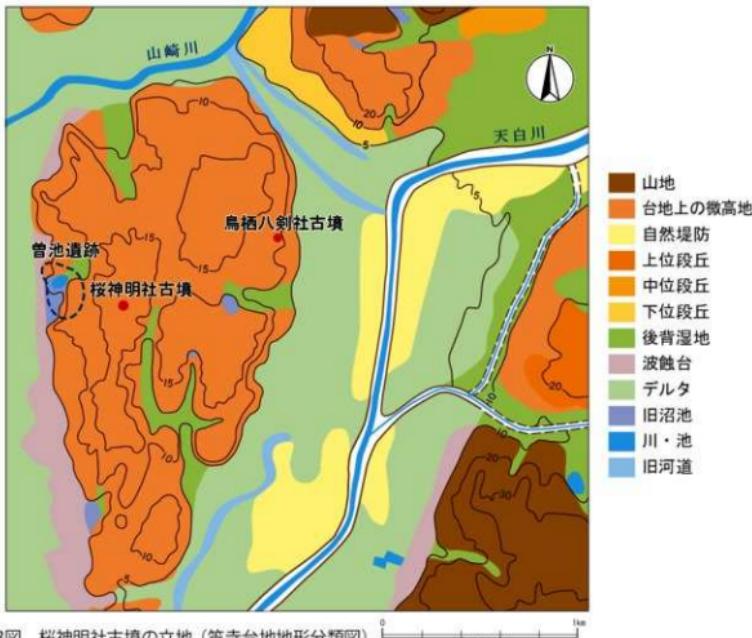


第41図 愛知県内出土の蓋形埴輪（尾張）



第42図 愛知県内出土の蓋形埴輪（三河）

鈴鹿市所在の岸岡山古墳群（鈴鹿川河口付近の河曲津）、鈴鹿市所在の経塚古墳（庵芸津）、津市所在の池ノ谷古墳（藤湯・後世の安濃津）が築造されたと指摘されている（文献53・66・67）。全長約94mの正法寺古墳や全長約111mの宝塚1号墳が前方後円墳であるのに対し、桜神明社古墳は直径約42mの円墳であることから、補佐する地位にあったと推定される。「初期倭王権の時代から古墳時代中期に至る過程で、伝統的な地域性が緩やかに消失し」、畿内王権の力が地域に浸透、そして連携していく様相を表していると考えられる（文献9）。



第43図 桜神明社古墳の立地（笠寺台地地形分類図）
大矢雅彦・杉浦成子編 1979『庄内川治水地形分類図』建設省中部地方建築局庄内川工事事務所 より作成

表6 伊勢湾沿岸の潟・港津と古墳

潟・港津	古墳名	古墳の形態・規模	年代
年魚市潟	桜神明社古墳	円墳・直径約42m	5世紀前半
河曲津	岸岡山古墳群 22号墳	前方後円墳・全長55m	6世紀初頭
庵芸津	経塚古墳	帆立貝式古墳・全長35.7m	5世紀初頭
藤湯(安濃津)	池ノ谷古墳	前方後円墳・全長90m	4世紀末 - 5世紀初頭
的潟	宝塚1号墳	前方後円墳・全長約111m	5世紀初頭
	佐久米古墳群 大塚山古墳	帆立貝式古墳・全長約45m	5世紀後半
三河湾・吉田港	正法寺古墳	前方後円墳・全長約94m	4世紀後半~5世紀初頭

表7 愛知県内の蓋形埴輪出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	墳形	規模	出土品			年代	文献
					円筒・朝顔 形埴輪	形象埴輪	土器		
1	毛無塚古墳 (浅井第10号墳) (県指定史跡)	一宮市浅井町尾 閑字同者	円墳	直径38m、 高さ3.5m	円筒	蓋形		古墳時代 後期	13、17、 26、44
2	稲沢大塚古墳 (市指定史跡)	稲沢市大塚南一 丁目(性海寺境内)	円墳	直径40~ 50m、高 さ4~5m	円筒・朝顔	蓋形・不明 形象埴輪	須恵器	5世紀後半	1、17、 18、19、 26、43、 44
3	高塚古墳 (市指定史跡)	北名古屋市(旧 西春日井郡西春 町大字鍛冶ケ一 色字襟70~76)	造出付 円墳	直径約40 m、高さ 約4.5m	円筒・朝顔	蓋形・家 形・盾形・ 甲形・草摺 形・不明形 象埴輪	土師器	5世紀前半	1、26、 30、46
4	能田旭古墳	北名古屋市(旧 西春日井郡勝 町大字能田字 旭)	帆立貝 式古墳	後円部直 径約37m、 前方部長 約8m、 高さ不明	円筒・朝顔	蓋形・家 形・馬形・ 人物	土師器 ・ 須恵器	5世紀後半	1、26、 35、36、 37、44
5	御旅所古墳 (県指定史跡)	春日井市二子町 二丁目	円墳	直径31m、 高さ約2.7 m	円筒	蓋形	須恵器	5世紀末~ 6世紀初頭	1、17、 26、27、 43
6	味美二子山古墳 (国指定史跡)	春日井市二子町 二丁目	前方後 円墳	墳長94m、 後円部直径 47m	円筒	蓋形・家 形・武人・ 馬形・盾 形・壺形	須恵器	6世紀前半	26、28
7	町田遺跡 (勝川大塚古墳 の埴輪か)	春日井市町田町	—	—	円筒・朝顔	蓋形?・盾 形	須恵器	5世紀末~ 6世紀初頭	26、32
8	長坂第6号墳	尾張旭市長坂町 南山	円墳	直径10m、 高さ2m	円筒・朝顔	蓋形	須恵器	5世紀後半	17、25、 26、43
9	池下古墳	名古屋市守山区 大字小幡字池下	前方後 円墳	全長約45 m、後円 部直径25 m	円筒・朝顔	蓋形	須恵器	5世紀末	26、33、 44、54
10	志段味大塚古墳 (国指定史跡)	名古屋市守山区 大字上志段味字 大塚	帆立貝 式古墳	全長約 51.5m	円筒・朝顔	蓋形・鶴 形・水鳥形	土師器 ・ 須恵器	5世紀後半	1、63
11	勝手塚古墳 (国指定史跡)	名古屋市守山区 大字上志段味字 中屋敷	帆立貝 式古墳	墳丘長55m	円筒・朝顔	蓋形		6世紀前半	56、63
12	松ヶ洞18号墳	名古屋市守山区 竜泉寺二丁目 1303	円墳	直径15.2 ×13.8m	円筒・朝顔	家形・蓋形	須恵器	5世紀末~ 6世紀初	57

番号	遺跡名	所在地	墳形	規模	出土品			年代	文献
					円筒・朝顔 形埴輪	形象埴輪	土器		
13	八幡山古墳 (国指定史跡)	名古屋市昭和区 山脇町一丁目	円墳	直径約85m、高さ 約10m	円筒	蓋形・家形		5世紀前半	1
14	大須二子山古墳	名古屋市中区門 前町	前方後 円墳	全長約75m～138m、 後内部直径 40～72m	円筒	蓋形		5世紀後半 ～6世紀前半	1、17、 26、44
15	城山第2号墳	名古屋市千種区 城山町一丁目	円墳		円筒・朝顔	蓋形			24、26
16	八高古墳	名古屋市瑞穂区 瑞穂町	前方後 円墳	現存長約 50m、推定 全長70m	円筒	蓋形・家 形・壺形		4世紀後半 ～5世紀前半	1、26、 44、61、 71
17	白鳥古墳	名古屋市熱田区 白鳥一丁目	前方後 円墳	全長70m 以上	円筒・朝顔	蓋形・青 形・盾 形？・動 物？	須恵器	古墳時代 後期	1、26、 60、61
18	桜神明社古墳	名古屋市南区呼 続四丁目	円墳	直径約42m、 高さ 4.9～5.9m	円筒	蓋形		5世紀初頭 ～前半	本書
19	井上1号墳	豊田市井上町	円墳	直径25m、 高さ3.5m	円筒	蓋形・不明 形象埴輪		5世紀初頭	8、26、 52
20	古村積神社古墳	岡崎市細川町字 長原	帆立貝 式古墳	全長30m、 前方部長 約8m	円筒	蓋形・家 形・盾形・ 馬形・犬 形・鶴形・ 猪形・人 物・椅子	須恵器	5世紀末～ 6世紀初頭	1、17、 26、40、 43
21	東山2号墳	岡崎市岩津町字 東山	円墳	直径9m	円筒	蓋形・馬形		不明	1、7、 26、40
22	経ヶ峰1号墳	岡崎市丸山町字 経ヶ峰	帆立貝 式古墳	全長35m	円筒・朝顔	家形・團 形・蓋形・ 盾形・短 甲形・草摺 形・鶯形	須恵器	5世紀後半	17、21、 26、40、 43、44
23	外山3号墳	岡崎市戸崎町字 外山	造出付 円墳	直径約25m	円筒	家形・蓋 形・盾形・ 人物・動物	須恵器	6世紀初頭	1
24	小針遺跡 (小針5号墳)	岡崎市小針町	造出付 円墳	直径19.5m	円筒・朝顔 形	蓋形	土師器 ・須恵器	5世紀後半	1、22

番号	遺跡名	所在地	墳形	規模	出土品			年代	文献
					円筒・朝顔形埴輪	形象埴輪	土器		
25	寄名山1号墳 (瀬門古墳)	西尾市(旧幡豆郡吉良町大字岡山字寄名山)	方墳または造出付円墳	一辺20mまたは直径20m(推定)	円筒	蓋形		5世紀中葉	6、17、26、44
26	岩場古墳 (県指定史跡)	西尾市(旧幡豆郡吉良町大字小山田字大山)	帆立貝式古墳	全長約30m	円筒	蓋形・短甲形、家形	須恵器・土師器	5世紀	1、4、17、26、44
27	正法寺古墳 (国指定史跡)	西尾市(旧幡豆郡吉良町大字乙川字西大山)	前方後円墳	全長約94m、後円部直径約65.5m、前方部幅約56.5m	円筒	蓋形・家形		4世紀後半～5世紀初頭	1、5
28	船山第2号墳	豊川市八幡町上宿	方墳	一辺19.5m、高さ2.5m	円筒	蓋形		5世紀中葉	17、26、41、43、44、51
29	上向伊田4号墳	豊田市亀首町上向伊田	窓		円筒	家形・蓋形・動物もしくは人物・不明形象埴輪	須恵器	5世紀末～6世紀初頭	16、25、44

引用・参考文献

- 1 愛知県史編さん委員会編 2005『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』愛知県
- 2 愛知県史編さん委員会編 2012『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県
- 3 愛知県神社庁編 1992『愛知県神社名鑑』愛知県神社庁
- 4 愛知県幡豆郡吉良町編 1957『岩場古墳』愛知県幡豆郡吉良町
- 5 愛知県幡豆郡吉良町教育委員会編 2005『史跡正法寺古墳範囲確認調査報告書』愛知県幡豆郡吉良町教育委員会
- 6 愛知県幡豆郡吉良町教育委員会編 2010『古墳時代遺跡調査報告書』愛知県幡豆郡吉良町教育委員会
- 7 愛知県立岩津高等学校郷土史研究会編 1957『岡崎市北部の古墳』愛知県立岩津高等学校
- 8 赤塚次郎 1988「挙母の古墳」『水源山南古墳』愛知県教育委員会
- 9 赤塚次郎・早川万年 2006『古代史の舞台 東海・東山』『列島の古代史1 古代史の舞台』岩波書店
- 10 伊賀高弘 2007「『きぬがさ』形埴輪雑感(上)ーその形と役割に関する覚え書きー」『京都府埋蔵文化財情報 第102号』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 11 伊賀高弘 2007「『きぬがさ』形埴輪雑感(下)ーその形と役割に関する覚え書きー」『京都府埋蔵文化財情報 第103号』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 12 池田隆介・桜井克郎 2016『増補 南区の歴史探訪』 ブックショッピングマイタウン
- 13 一宮市浅井町史編纂委員会編 1967『一宮市浅井町史』一宮市役所浅井支所
- 14 市橋芳則 1989『付載2 蓋形埴輪の製作技法について』『能田旭古墳II 第二次発掘調査報告』師勝

- 町教育委員会
- 15 伊藤良明 2012「尾張における埴輪導入期の様相—高塚古墳への埴輪導入と地域社会の動態—」『東海の古代③ 尾張・三河の古墳と古代社会』(株)同成社
 - 16 伊藤 昌はか 1969『来姓遺跡群・上向イ田古窯址群』猿投町誌編集委員会
 - 17 稲沢市教育委員会編 1983『大塚古墳範囲確認調査報告書(Ⅰ)』稲沢市教育委員会
 - 18 稲沢市教育委員会編 1984『大塚古墳範囲確認調査報告書(Ⅱ)』稲沢市教育委員会
 - 19 井口喜晴編 1984『新修稲沢市史 資料編6 考古』稲沢市
 - 20 上村安生 1986「三重県内出土の形象埴輪について」『三重県史研究第2号』三重県
 - 21 岡崎市教育委員会編 1981『経ヶ峰1号墳』岡崎市教育委員会
 - 22 岡崎市教育委員会編 1999『小針遺跡』岡崎市教育委員会
 - 23 小栗明彦 2007「蓋形埴輪編年論」「埴輪論考 I —円筒埴輪を読み解く—』大阪大谷大学博物館
 - 24 小栗鐵次郎 1929『田代城山の古墳』『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告第7』愛知県
 - 25 尾張旭市教育委員会編 1983『長坂古墳群—第5号墳・第6号墳の調査—』尾張旭市教育委員会
 - 26 加賀貴巳子 1994「愛知県内出土の形象埴輪地名表」『高塚古墳発掘調査報告書』西春町教育委員会
 - 27 春日井市教育委員会民俗考古調査室編 1991『特別展 ハニワの時代—下原古窯と味美二子山古墳—』春日井市教育委員会
 - 28 春日井市教育委員会編 2004『味美二子山古墳』春日井市教育委員会
 - 29 株式会社角川書店編 1992『なごやの町名』名古屋市計画局
 - 30 北名古屋市歴史民俗資料館編 2010『高塚古墳確認調査報告』北名古屋市歴史民俗資料館
 - 31 川村和子 1997「5世紀代の蓋形埴輪の変遷」『西暮山古墳』藤井寺市教育委員会
 - 32 財団法人愛知県埋蔵文化財センター編 1989『町田遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
 - 33 財団法人愛知県埋蔵文化財センター編 1991『池下古墳』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
 - 34 寒川 旭 1997『揺れる大地 日本列島の地震史』同朋舎出版
 - 35 師勝町教育委員会編 1986『能田旭古墳 第一次発掘調査報告』師勝町教育委員会
 - 36 師勝町教育委員会編 1989『能田旭古墳II 第二次発掘調査報告』師勝町教育委員会
 - 37 師勝町教育委員会編 1991『能田旭古墳III 第三次発掘調査報告』師勝町教育委員会
 - 38 新修豊田市史編さん専門委員会編 2020『新修豊田市史 通史編 原始』愛知県豊田市
 - 39 新修名古屋市史資料編集委員会編 2008『新修名古屋市史 資料編 考古1』名古屋市
 - 40 新編岡崎市史編集委員会編 1989『新編岡崎市史 史料考古下16』新編岡崎市史編さん委員会
 - 41 新編豊川市史編集委員会編 2002『新編豊川市史 第5巻 資料編原始・古代・中世』豊川市
 - 42 新編豊川市史編集委員会編 2011『新編豊川市史 第1巻 通史編原始・古代・中世』豊川市
 - 43 仙作田作吉 1983「愛知県における古墳出土の形象埴輪」『長坂古墳群—第5号墳・第6号墳の調査—』尾張旭市教育委員会
 - 44 第17回埋蔵文化財研究会実行委員会編 1985『形象埴輪の出土状況』埋蔵文化財研究会
 - 45 高木市之助・五味智英・大野 晋校注 1957『日本古典文学大系4 万葉集一』岩波書店
 - 46 高塚古墳発掘調査委員会編 1994『高塚古墳発掘調査報告書』西春町教育委員会
 - 47 高橋克壽 1988『器財埴輪の編年と古墳祭祀』『史林71巻2号』史学研究会

- 48 高橋克壽 2012『八 墳輪』『講座日本の考古学8 古墳時代(下)』青木書店
- 49 田中秀和 1988『畿内における蓋形埴輪の検討』『ヒストリア 118』大阪歴史学会
- 50 筒井崇史 2009『蓋形埴輪の変遷について』『京都府埋蔵文化財情報 第110号』財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 51 豊川市教育委員会編 1965『昭和40年豊川市古墳調査概報』豊川市教育委員会
- 52 豊田市教育委員会・有限会社アルケーリサーチ編 2008『井上1号墳』豊田市教育委員会
- 53 中井正幸・鈴木一有 2011『六 東海』『講座日本の考古学7 古墳時代(上)』青木書店
- 54 名古屋市教育委員会編 1969『守山の古墳調査報告第二』名古屋市教育委員会
- 55 名古屋市教育委員会編 1970『写真図説 名古屋の史跡と文化財』名古屋泰文堂
- 56 名古屋市教育委員会編 2019『埋蔵文化財調査報告書83 志段味古墳群IV』名古屋市教育委員会
- 57 名古屋市教育委員会編 2021『埋蔵文化財調査報告書89 松ヶ洞18号墳』名古屋市教育委員会
- 58 名古屋市教育委員会編 2021『見晴台遺跡発掘調査報告書(第49・50・51次)』名古屋市教育委員会
- 59 名古屋市史蹟名勝調査保存委員会 1951『名古屋史蹟名勝紀要』名古屋市役所弘報室
- 60 名古屋市見晴台考古資料館編 1985『熱田区・白鳥古墳』名古屋市教育委員会
- 61 名古屋市見晴台考古資料館編 1987『白鳥古墳第Ⅱ次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
- 62 名古屋市見晴台考古資料館編 1996『曾池遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
- 63 名古屋市見晴台考古資料館編 2011『埋蔵文化財調査報告書62 志段味古墳群』名古屋市教育委員会
- 64 西田和浩 2018『形象埴輪の造形』『平成30年度岡山市埋蔵文化財センター講座 2018年9月15日』
- 65 保立道久・成田龍一監修 2013『津波、噴火… 日本列島地震の2000年史』朝日新聞出版
- 66 稔積裕昌 2013『伊勢神宮の考古学』雄山閣
- 67 稔積裕昌 2017『シリーズ「遺跡を学ぶ」117 船形埴輪と古代喪葬 宝塚一号墳』新泉社
- 68 松木武彦 1990『蓋形埴輪の変遷と両期—畿内を中心にして—』『鳥居前古墳—総括編—』大阪大学文学部考古学研究室
- 69 三重県 2005『三重県史 資料編 考古 1』三重県
- 70 三渡俊一郎・飯尾恭之 1969『南区の原始古代遺跡』名古屋市教育委員会
- 71 三渡俊一郎 1981『熱田・瑞穂区の考古遺跡』名古屋市教育委員会
- 72 窯業史博物館編 1995『変わりゆく旅の器たち 汽車土瓶』窯業史博物館
- 73 吉川秀造ほか 1955『大正・昭和名古屋市史 第9巻 地理編』名古屋市役所
- 74 吉田富夫 1967『名古屋考古ガイド』名古屋市文化財調査保存委員会
- 75 吉田富夫・大參義一 1973『名古屋の遺跡百話』名古屋市教育委員会
- 76 和田一之輔 2011『③形象埴輪の編年と両期』『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み』(株)同成社
- 77 伊藤正人 1993『愛知県—古墳時代の祭祀関係遺跡・遺物—』『第2回 東日本埋蔵文化財研究会 古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』東日本埋蔵文化財研究会
- 78 早野浩二 2006『県内遺構・遺物集成、石製模造品』『設立20周年記念論集 研究紀要第7号』愛知県埋蔵文化財センター



1 桜神明社古墳遠景（南東から）



2 桜神明社古墳と本殿（北東から）



3 桜神明社古墳と本殿（北から）



4 桜神明社古墳西裾（北西から）



5 墳丘から拝殿・廊下を臨む（北から）



6 墳丘北側の濠（西から）



7 墳丘南東部（西から）



8 墳丘北側の濠（南東から）

写真図版2 第1トレンチ



1 調査地遠景（西から）



2 調査地遠景（東から）



3 調査区全景（東から）



4 調査区全景（西から）



5 北壁西端土層断面（南から）



6 北壁東端土層断面（南から）



1 調査風景（西から）



2 調査区全景（東から）



3 調査区全景（北西から）



4 舊石出土状況（西から）

写真図版4 第3トレンチ



1 調査区全景（北から）



2 調査区全景（南から）



3 東壁南端土層断面（西から）



4 東壁中央土層断面（西から）



5 調査区南端（北から）



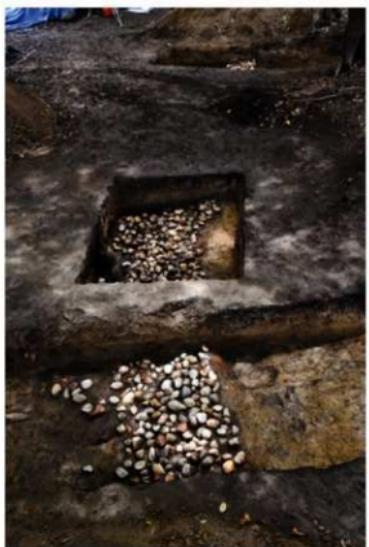
6 調査区北端（西から）



1 調査区全景（北から）



2 調査区全景（南から）



3 葦石出土状況（西から）



4 葦石出土状況（東から）

写真図版6 第4トレンチ



1 調査区全景（南から）



2 填丘と葺石出土状況（北西から）



3 調査区と填丘・本殿（北から）



4 萎石出土状況（西から）



5 萎石出土状況（西から）



6 第4トレンチ（東）（北から）



7 第4トレンチ（東）（南から）



1 塚輪出土状況（東から）



2 土器出土状況（北から）



3 須恵器出土状況（北から）



4 東壁北端土層断面（西から）



5 第4トレンチ（北）（北から）



6 第4トレンチ（北）（南から）



7 第4トレンチ（北）東壁土層断面（西から）

写真図版8 第5トレンチ



1 調査区全景（北から）



2 調査区全景（南から）



3 菖石・埴輪出土状況（北から）



4 塹輪出土状況（西から）



5 調査区北端東壁土層断面（西から）



6 調査区北端東壁土層断面（西から）



1 調査区全景（北から）



2 第6トレンチ（南）全景（北から）



3 第6トレンチ（南）南端西壁土層断面（東から）



4 第6トレンチ（南）中央西壁土層断面（東から）



5 第6トレンチ（南）北壁土層断面（南から）



6 第6トレンチ（北）（東から）

写真図版10 第7トレンチ



1 調査区全景（東から）



2 葦石出土状況（南から）



3 調査区西端南壁土層断面（北から）



4 調査区西壁土層断面（東から）



5 調査区内中央土層断面（北壁）（南から）



6 第7トレンチ（西）全景（西から）



7 第7トレンチ（西）土層断面（北から）



1 第7トレンチ（東）（北西から）



2 第7トレンチ（東）（西から）



3 南壁土層断面（北から）



4 蒼石・埴輪出土状況（北から）



5 調査風景



6 調査風景



1 調査区全景（西から）



2 調査区全景（東から）



3 調査区東壁土層断面（西から）



4 調査区南壁土層断面（北から）



5 調査区東端南壁土層断面（北から）



1 笠下半部の線刻



2 笠下半部の線刻



3 笠下半部の断面



4 笠下半部の内面



5 笠下半部の外面

写真図版14 遺物



1 陶器・ガラス瓶ほか 第1トレンチ出土



2 陶器・埴輪 第2トレンチ出土



3 磁器 第3トレンチ出土



4 玩具 第3トレンチ出土



5 塩輪 第3トレンチ出土



6 塩輪・灰釉陶器 表採



7 塩輪 第4トレンチ出土



8 塩輪 第4トレンチ出土



1 塙輪 第4トレンチ出土



2 塙輪 第4トレンチ出土



3 塙輪 第4トレンチ出土



4 土師器 第4トレンチ出土



5 須恵器 第4トレンチ（東）出土



6 塙輪 第4トレンチ（東）出土



7 塙輪 第4トレンチ（東）出土



8 塙輪 第4トレンチ（東）出土

写真図版16 遺物



1 埴輪 第4トレンチ(東)出土



2 埴輪 第4トレンチ(北)出土



3 埴輪 第5トレンチ出土



4 埴輪 第5トレンチ出土



5 汽車土瓶 第6トレンチ出土



6 汽車土瓶 湯呑を被せた状態



7 埴輪 第7トレンチ出土



8 陶器・須恵器・埴輪 第8トレンチ出土

報告書抄録

名古屋市文化財調査報告書 111
埋蔵文化財調査報告書 94
桜神明社古墳（試掘調査）

2022年3月15日 発行
編集・発行 名古屋市教育委員会
印刷 共生印刷株式会社